“エデンの鍵”と生徒会という名の探索部隊《ファインダー》

成瀬　葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
“エデンの鍵”と生徒会という名の探索部隊（ファインダー）

【Nコード】
N6139H

【作者名】
成瀬　葵

【あらすじ】
国立の魔法学園『神獄学園』にて、平凡な生活を送っていた主人公『成瀬政行』は生徒会への勧誘により、平凡な生活が一変した。
謎の物体『エデンの鍵』を探すというわけの分からない事に疑問を覚えながら、少年の周りの状勢は非常識に変化していく・・・

第1話　エデンの鍵の行方（前書き）

遅れて申し訳ありません。この話を読む前の注意事項です。

こちらの手違いで、同じ作品を出してしまいました。本当の1話は、1話しか掲載されていないほうです。そこから呼んでいただきたいです。

お手数おかけして、申し訳ありませんでした。今後とも、よろしくお願いいします。

第1話　エデンの鍵の行方

「エデンの鍵が見つかったって本当なの、岡田君」

　学校の敷地内にある森の中を生徒会風紀委員長の岡田　信之について走っていると、現生徒会長、本条　茜はおもむろに口を開いた。

「間違いないみたいだ。第一発見者は何を隠そうあの『是沢』なんだからな」

「・・・・それなら大丈夫そうだけど・・・」

会長は、不安そうに黙る。ぼく、成瀬　政行はただただ二人について行くだけだ。

「そう言えば、岡田先輩。是沢って人はどういう人なんですか？」

「ああ、まだお前は会ってなかったな。まぁ、知らなくて仕方ないだろう。本条の異常な勧誘で碌に話も聞けてないだろうからな。」

「岡田君・・・・」

　会長は静かにつぶやき、微笑んでみせる。朴念仁のぼくでも分かる。・・・この人、地雷踏んだな。

「冗談。冗談だって会長さんよー。会長は、悪くないって〜」

「ふーん・・・」

会長、笑顔が怖いです！　もっとシャープに行きましょう！！

「おっと、悪い。話、途中だったな。是沢ってのは俺たち生徒会役員の一人なんだが、すごい気分屋で、滅多に生徒会執行室に来ないんだ。でも、そいつは『占い学』や高度の千里眼を持っているから、エデンの鍵を探してもらって居たんだ。最も、今も仕事してるかどうかは分からないが・・・」

占い学・・・そんなものもあったなぁ。あまり得意じゃなかったから、判んないけど・・・

てゆうか、あんなに覚えることがあるのに、よくやれたもんだな。先生曰く、『1年生で習うのは、占い学全体の0，1％程度だ』って言うのに、属性魔術理論の倍はあるのに・・・

あ、考えただけで目眩がしてきた。でも・・・やっぱりすごい人なんだろうな。

こんな言い方悪いけど、会長は出来の良い人材しか生徒会役員に任命しない。ぼくを除くこの人たちも魔法に長けているんだと、その技術を目にするたびに思う。

岡田先輩は、五大属性を操る『エレメント使い』で特に、水と炎の扱いに長けている。

会長は、『アンチマジック』。つまり、科学なり魔法なりのエネルギーを変換するのが得意だ。

それに引き換えぼくは・・・まだまともな魔法が使えない。どうして会長がぼくを選んだのか・・・謎が謎を呼ぶばかりだ。

「さぁ、着いたぞ。ここだ」

そう言って岡田先輩は足を止めた。それに続けて会長、ぼくの順で足を止めた。目の前には、木造の小屋が建っている。それも、本物の魔女が住んでそうな、重く・暗く・冷たい感じの。

「さ、中に入りましょう。」　「ああ、そうだな」

会長は扉に手を当て、開けた。中は、何にも見えない。真っ暗だ。会長はそれにひるまず、開いた扉の向こうに手をかざした。

『汝、闇に身を委ねし者。その呪縛の鎖を断ち切り、暗き闇を照らす導(しるべ)となれ・・・・・』

その刹那、吸い込まれそうな暗闇は消え、通路が現れた。

「岡田先輩、今のが『アンチマジック』ですか」

そう呟くように言うと、先輩hも呟き返した。

「ああ・・・ホント、見る度思うが、一番おっかないのは会長かもしれないいな。」

「同感です」

「?何してるの。早くしないと置いていくわよ」

『・・・はい』

そうしてぼくらは、小さな小屋の中へと入っていった・・・

第1話　エデンの鍵の行方（後書き）

3話もお楽しみに

真実と虚構（前書き）

遂に核心に迫り始めました

真実と虚構

「ところで、そもそも"エデンの鍵"って何なんですか？」

小屋の中の狭くて暗い通路を通行中、ぼく、成瀬　政行は前ににいる岡田先輩に尋ねてみた。実際、生徒会に入って（強制入会させられて）1週間近く経つけど、未だ会長からは何の話も聞いていない。そろそろ、聞いておかないといろいろトラブるかも知れないし・・・

「どうって言われてもなぁ。う～ん・・・どう言ってしまえば良いのか・・・まぁ、是沢のとこに着いたら本条が話してくれるだろう。」

「だといいんですけど・・・」

そう言ってぼくは、目を細め、俯いた。別に話してくれないことを僻んでいるんじゃない。会長も何か考えがあったからかもしれないし・・・ただ、自分だけ除け者にされているじゃないかと思い、ついつい心が揺れてしまう。『エデンの鍵』なんて得体の知れない物には興味ないけど、会長を含めた先輩役員たちが探し出し、破棄しようとするには訳があるはずだ。多分それを知り、最後まで見届けるのがぼくの役割なんじゃないかと、今になって思う。

「さ、着いたわよ」

会長の視線の示す先には何の変哲もない普通の扉がある。この中に是沢先輩がいる。

きっと、今この瞬間から、何かが始まるんだ。そう・・・何かが

「是沢君、入るわよ」

数回ノックした後、そう言って会長は扉を開いた。そして、それと同時に――――

「この世界の神は、この俺だ～～～～～っっっっ！！！！」

・・・・・・はっ？と一同口を開け、ポカ～ンとしている。

「誰が決めたか知らないが、この幾多の戦場を駆けぬけ、討ち取った敵は数知れずの鬼神軍曹『マコっちゃん』が神ではなくて、誰が神だというのかっっっっっ！！！」

・・・・・そうか。今、確信した。ウチの生徒会にまともな人は皆無だということを。

「はぁ～・・・・」

会長は、俯きながら眉間を親指と人差し指で押さえ、溜息を漏らす。・・・何か。会長がこんなんに成ってしまった理由が、少しだけ理解できた。素直に思う。アンタは偉いっと。

「2人とも、悪いんだけどここで待っていてもらえる？」

「いいが、何する気だ？」

「・・・・懲らしめに」

・・・あ、・・そうですか。せめてとばっちりが来ないようにしよう・・・
そう思っている間に会長は、ドアを開け、中に入って行った。個人的にはこの時に鳴る『ギィ〜』って音が余計に何かを煽っているようで冷や汗が出てきた。

「是沢先輩、大丈夫でしょうか？」

「平気だろ、毎度の事だし。・・・・多分」

「『多分』ってことは自信ないんですか」

「いや、そうじゃない。・・・今までは本条も平常だったからそこまで酷くはならない。だが、今の本条は、焦っているいから平常とは言えん。」

「『焦ってる』ってエデンの鍵絡みのことですか？」

「ああ、その通りだ。さっきは変にはぶらかしてしまって、本条任せにしていたが、もうこの際だ。オレの口から説明しよう。決して目を背けるなよ」

岡田先輩が、発言することで今まで謎だった、『エデンの鍵』についての詳細を知る事になる。でも、どうしてだろう・・・背中を這いずり回る、気色の悪い悪寒が静かに告げている。『知ってはならない』と・・・『知れば、後戻りは出来ない』と・・・その不確かな不安は、すぐ目の前で、確信を持った恐怖へと変わった。

「・・・エデンの鍵は・・・・・先代の人類が生み出した・・・・・

神に等しい力を持った・・・・・殺戮兵器だ・・・」

目の前のことは真実。振り返ったことは虚構。いま、やっと理解した。

自分たちは、悲劇という真実を飲み込もうとしていることに・・・・

真実と虚構（後書き）

急いで次を書きます

お楽しみに・・・

覚悟を携える少女

「で、是沢君。『エデンの鍵』はどこにあるの！？」

あたかもかつ上げをしている不良のように相手の胸座を掴み、揺さぶっている会長こと、本条　茜は無理な作り笑いをしながら、是沢先輩に尋ねている。

・・・いや、この状況だと吐かせようとすると言った方が正しい。

「か、か、会長ぅ・・・し・・死ぬぅ・・・死ぬって・・・」

また、会長の力を前に、半ば窒息の半殺しに遭っている是沢先輩の悲痛な叫びも今の会長には、聞こえないだろう。・・・・この場合、会長をなだめ、事態を収束されるのが当然なのだろうけど、今のぼくにそれは隔離された世界の外側の事としか思えない。

岡田先輩が言ってた『エデンの鍵は、神の力を持つ、殺戮兵器だ』という言葉が今も耳に残って離れようとしない。況してや、腹にどんどん溜まっていく『何か』をさらに大きくしているような・・・嫌な感覚。

・・・・・背中が寒ぃ

「いいから言いなさいっ！！　言わないんなら、燃やすわよっ！！！　永久脱毛剤ぶっ掛けるわよっ！！！！　いつまでもあなたのおふざけに構ってる暇はないのよっっっ！！！！殺されたくなかったら、さっさと吐きなさいっ！！！」

「おい、本条！焦っているのも分かるが、やめろっっ！！死ぬぞ、

1是沢が！！！」

岡田先輩が割り入って制止させようとするが、会長は止まらない。まるで走り出した猪のように。もうどうにも成らないのか・・・と思ったときだった。

「もう、いい加減にしてくださいっ！！」

その声で、一同、制止し、こちらに顔を向けた。みんなポカーンと口を開け、唖然としている。

その声は、岡田先輩でも、是沢先輩でも、況してや会長でもない。

・・・・・・・

ぼく自身の咆哮だ。

自分でも分からない。それなのに、体が、口が、心が、勝手に動く。まるでいま、自分が何をすべきか、体が理解しているかのように・・・

「会長・・・岡田先輩から聞きました。『エデンの鍵』は殺戮兵器だそうですね。

どうして黙ってたんですかっ！

そんなにぼくが信用なりませんかっ！確かにぼくは、生徒会役員になって少ししか経ってませんけど、皆さんの力にだってなれるんです、なりたいんです・・・

他にも隠している事があるんでしょうっ！？

いい加減、話してくれても良いいんじゃないんですか？・・・」

いきなりキレて、怒鳴って、頭の中がぐちゃぐちゃになって、胸が熱くなる。

会長を除く先輩がたは、何かを察したように会長に視線を向けた。

「本条、そろそろ良いんじゃないか？」

「会長さん、俺も同意見です。」

会長は、是沢先輩から手を離し、俯いて、下唇をかみ締めた。何かを決心するかのように、迷いを払うように、今まで肩を小さく震わせていた会長は立ち上がる。そしてーーーー

「・・・・ごめんなさい。私だけ覚悟決めないで・・・こんなの、駄目よね・・・・分かった。ここに居る全員、明日の放課後に生徒会室に来て。その時全てを話すわ。・・・」

会長の言葉の後、全員が思い思いに頷く。

この瞬間から、全てが始まるように・・・・

覚悟を携える少女（後書き）

どしどし、更新していくので
待ってて下さい。

第2話　明かされた真実（前書き）

少々、長めなので読みにくいかもです

第2話　明かされた真実

「さて、なにから話していいのやら・・・・・」

生徒会室にて、机に向かい、肘をついて手を絡めながら、生徒会長本条　茜は憂いに満ちた声で呟く。ちなみに、この憂いには訳があり、決して意味深な事を言って何かを引き起こそうなどという安易かつ痛い子の妄想が具現化すると信じている中二病的なものではないので、誤解しないでいただきたい。

さて、その訳なのだが、昨日の是沢先輩のアトリエ（先輩曰く、作業部屋）において『エデンの鍵』についての詳しい情報を提供するよう声を上げて、申し出たことだ。これは、岡田先輩や是沢先輩から聞いた事なのだが、どうやら会長は、是が非でも自分の後輩にエデンの鍵の正体を知らせたくなかったらしい。その理由は岡田先輩曰く、『それ聞いたらさ、二度と後戻りできないし、内容はヘビーだから、責任で潰れるかも知れない。というのが本条の見解なんだわ。実際俺も、潰れかかったし・・・・それを、本条は心配してるんだ』って言ってた・・・

訳のわからないまま、巻き込まれたけど、何もできないまま巻き込まれたくない。・・・・

そう。あの時のように、何もしないまま失いたくないから――――

――――

「さて、成瀬君。君は『エデンの鍵』についてどこまで知っているのかしら？」

「・・・・・岡田先輩が言ってたことぐらいしか・・・・・」

　エデンの鍵。始めは石油や電気と同じ、エネルギー的なものだと思っていた。でもそれは、自分の抱いていた勝手な空想で、蓋を開けてみると、神と同等の力をもつ殺戮兵器だと聞かされた。本当のとこ、そんなものが在るだけでも嫌だし、怖い。

「そう・・・では、これはしってる？エデンの鍵が、私たちの扱っている魔法によって創られたって」

「・・・薄々そうではないかと思ってました」

「相変わらず、鋭いわね。そう、エデンの鍵というのは先代人類、つまりは私たちより一つ前に存在した人類が技術の粋を結集して創られたものよ。

　遥か昔、その先代人類の間では争いが絶えなかったらしいわ。しかも、それが１０年や２０年ではなく、数世紀にも亘ってね・・・・当然、争いを好まない人たちも居たわ。そして、その争いを好まない人たちが『戦争終結』のために創ったのが――――」

「エデンの鍵。というわけですね」

「ええ、そしてエデンの鍵が完成し、戦争が終結すると思われた、そのときに。

　エデンの鍵は、暴走したの。」

「暴走・・・・ですか」

「暴走したエデンの鍵は誰にも止めることができず、全てを滅ぼした・・・でも、幸いにも生き残った者も居てね、その人たちが、

暴走して疲労していたエデンの鍵を大陸の東の果てへ封印したの。
それから、現在に至るってわけ。」

「ちょっと、待ってください！そこで、終わられても疑問が多々あります！　なぜ会長はその事を知っているんですか？！その事とぼくらは何の関係があるんですか？！それか――」

「はいはい、そう焦らないで。一つずつ答えていくわ。
まず、『なぜ知っているのか』っていうのは、とある資料に書かれてあったのを見たからよ。
その資料というのは、『主約聖書』というものよ。名前は聞いた事ないかも知れないけど、簡単に言えば、『魔法の使い方が書かれた書物』、と言えば分かるかしら？」

「はい、その発見がこの学園の創設、牽いては魔法の存在を立証に大きな影響を与えたものだと聞いていますが・・・でも、あれは中国で発見されたものですよ？当然、中国の政府もそれを見ているはずです。なのに『エデンの鍵』なんてものは、マスコミの報道もなく、ネットにすら出ていないのはおかしいじゃないですか？」

「そう・・・思うでしょ？でも、実際にこのことを知っているのは、日本政府の一部の重鎮とこの学園の理事や職員、そして、私たち『生徒会役員』だけなの。」

「それは、なぜですか」

「さぁ。なんせ、魔法自体まだまだ解明されていないことが多いの。何らかの作用で隠滅したのか、或いは、その事が理解できなかったのか分からないけどね・・・」

「そう・・ですか・・・」

「じゃ、次ね。『私たちとの関係は』というのは、エデンの鍵がこの学園の何処かに在ると言う――――――

「そんなの当に知ってます！！てか、考えればわかります！」

「あ、そう・・・ならいいの・・・元々、学園が設立された理由は、『如何なる障害もなく、かつ、安易に捜査しやすくするため』だそうよ。普通に捜査したら、他国に勘付かれるかもしれないし、かと言って隠密になんて出来ない・・・だから、『国立の学園』にする事で、外からの干渉は出来なくなる。仮に、学園に生徒として潜り込んでも、いろんな管理体制だから迂闊に行動できない。そういう利点があるの。」

「・・・偉く、綿密ですね。計画が」

「そりゃそうよ。なんせ上の人たちは、エデンの鍵を悪用しようとしているもの」

「・・・嘘でしょ？」

「いいえ、表向きには『エデンの鍵を確保し、早々に破棄する』とは言ってるけど、それだったら、わざわざ学園なんて造んなくても、いろいろ口実立てて戦車とか爆弾とかで焼け野原にしてしまえばいいじゃない。封印されて身動きできないんだし。なのに学園という境界線を作って、なんていう回りくどいことをしている。裏があったっておかしくもなんともないわ。

だから、私たちが、やるの。『エデンの鍵破棄』を。

悪用されて、そのせいで犠牲になる人たちが必ず生まれるわ。そうなったら、それこそ先代人類の二の舞じゃない！！私たちが止めるの！！！絶っっっ対に！！！！！」

これがぼくらのやるべきこと・・・・

その重圧は確かに、どんなことも小さく思ってしまうぐらいのものの

この先、ぼくらは何を選択し、どこへと行き着くのだろうか

それは。神様にしか分からないこと・・・・

第2話　明かされた真実（後書き）

いかかでしたか？
ご意見、ご感想あればどしどしください
いつでも待ってます。

役員、全員集合！！

「ちーす、遅れてすまない。ん、本条、成瀬。何机の上でジュゴンみたいにだれてんだ？」

生徒会室を開け、岡田先輩が笑顔で入ってきた。何かツッコミ的なものを入えられたような気がしてが、気にしないようにしよう・・・

「うう、岡田君・・・この話する度に、人殺したような罪悪感に飲まれるの・・・なんとかしてー」

「何とかって、いい加減慣れろ。いつまでもウジウジしたってしょうがないだろう。」

「そんな呆れたように言わないでぇ、普通さぁ、こんなに可愛くて、笑顔がプリティーで、しっかりしてる幼馴染には、もっと優しくするべきよ。」

「いや、そこまで可愛いと思ってないし。つーか、笑顔がプリティーじゃなくて、営業スマイルがうまいって言ったほうが、性に合ってる。」

「うわぁぁぁん！岡田君がいじめるぅ～」

「いや、いじめてない。思ったことを言ったまでだ」

「・・・ひどい、乙女心の傷が―――」

「つかない！！」

岡田先輩がそう言うと、会長は部屋の隅に行き、いじけてしまった。

「いいんですか？ほっといて」

「何、かまわんさ。本条が拗ねても基本無害だから」

と言いながら、岡田先輩は自分の席に着く。

「そういう意味ではなくて、会長のケアの方です」

「本条の拗ねなんて2，3分したら治るから、平気だろう」

「だといいんですけど」

岡田先輩は少しだけ笑って見せた。今まで思わなかったけど、『エデンの鍵』という殺戮兵器がこの学校の何処かにあるというのに、どうしてこうも平然としてられるのだろう？

やっぱり、生徒会役員の人たちは器量が大きいんだなと思い、胸が締め付けられる。

「あ、そうそう成瀬、本条からどこまで聞いた？」

「要約すれば、『エデンの鍵という殺戮兵器があって、日本政府がそれを悪用する可能性があるから、破壊しましょう』ってぐらいですね」

「まぁ、そんなとこだが・・・・他に聞いてないか？」

「他に・・・と言うと？」

「いや、本条のことだから真っ先に言ってそうな事があったんだが、そうか・・・聞いてないか・・・」

「会長が真っ先に言う事・・・ですか？」

「ああ、それはだな――――――――」

「チョリースッ！アカ姉はいるか～い！」

そこには思いも寄らない人物が扉のとこに立っていた。その人はとびらを閉め、辺りを見回した。
そして、ぼくとその人は、ハモッてこう言うのであった。

『なんでお前（君）がここにいるんだぁぁぁ～～～～』

・・・・2分後、その人物は席についた。

「大和、なんで君はここにいる？！」

「なんでって、ワシも生徒会役員になったからに決まっているじゃないか、マサキ」

大和　翔。ぼくの同級生で、同じ中学出身の人物。中学時代には一番仲が良かった友人なのだが、こっちに入学して以来、クラスが違うため、あまり会っていない。
ちなみに、「マサキ」とは、こいつだけが使う、ぼくのあだ名だ。

本人曰く、こっちのほうが言いやすいかららしいけど・・・

「まぁ、仲ようしてや」

「急に関西弁使うな」

「細かいことは気にするなや、ワシはマサキが元気そうでなによりや」

「お前ら、知り合いか？」

「ええ、そんなとこです」

「ところで、岡田さん。アカ姉居てます？」

「本条なら、そこの部屋の隅に・・・ってあれ？いない」

「私ならここよ」

声のした方を向くと確かに会長が、自分の席に腰を降ろしていた。岡田先輩の言った通り、2，3分で治るんだなぁ・・・

「で、翔。用件は？」

「あのさ、言われたとおり、是沢さん持ってきたけど、どないすんの？」

「人を道具見たいに言うな」

そういえば、大和との会話で忘れてたけど、是沢先輩居たんだな

ぁ。個人的には是沢先輩より大和が来た事に驚いたけど・・・

「そう、ならいいわ。ありがとう・・・・では、今日の議題を発表しま～す！」

今、ここに居る全員が会長に視線を集めながら、勢いよく立ち上がり、こんな事を言ってのけた。

「今日は、戦闘訓練をしま～す！」

一同の反応は言わずと知れたことだが、唖然とし、開いた口が塞がらないでいる。

『はあっ』

役員、全員集合!!（後書き）

いかがでしたか?
どんどん更新していくのでぜひ、感想などよろしくお願いします。

戦闘予行・岡田VS是沢（前書き）

やっと来た戦闘シーンです。
少し、粗いかもです。

戦闘予行・岡田VS是沢

「さて、始めましょうか」

腰に手を当て、にこやかに微笑みながら、会長は高らかに宣言する。

「待ってください」

「あら、どうしたの成瀬君」

「どうしたもこうしたもありませんよ！！こんな狭いところで戦闘なんてできないでしょ。」

そう、ここはかつて是沢先輩が『エデンの鍵』を発見した際、会長、岡田先輩とボクで訪れた小さな小屋の中だ。当然こんなところで戦闘なんかしたら、こっちの被害は免れないどころか、学園にまで被害が拡大してしまう。

「なんだ、そんな事かい？成るチャン」

「是沢先輩、その『成るチャン』て呼ぶの、やめてくれませんか」

「えぇ、結構気に入ってるのにぃ」

「そうだぞ、マサキ。いいじゃないか呼び方ぐらい。中学の頃は自分のこと、『皇帝陛下』と呼べって言ってたじゃないか」

「そんなこといってないし、勝手に事実を改ざんしないでくれ、オ

タク」

「オタクって、ひどくない？」

大和がグダグダ言っているが、スルーして話を進める。

「だいたい、戦闘と言ってもボクはまだ、碌に魔法を習っていませんし」

「その辺は、心配無用よ、場所も、魔法の方も、ね・・・・・」

そう言って会長は、部屋の扉に手を当てた。そして―――――

『ラスタム・ファージ（空間・強制歪曲）！』

その言葉と共に、今まで机と椅子しかなかった部屋が、大きく歪み、空間が広がっていく。

１０秒としないうちに、そこは、途轍もなく巨大な闘技場へと変化していた。

「な・・・こんなことが・・・・・」

岡田先輩、是沢先輩はいつも通りの感じだが、大和とボクは唖然としアングリと口を開けている。

「どう？驚いたでしょ。簡単に説明すれば、空間の中にあった余分なものを歪める事で、一時的に『存在しないもの』として扱うことができる魔法よ」

会長は、扉から手を離し、こちらに来る。その顔は何処か誇らし

そうだ

「こんなの・・・授業で習った事が―――」

「そりゃ、当然よ。私たち役員が使う魔法は、他の生徒とは別物だもの」

「・・・・・どういうことですか？」

「う～ん、そうね・・・・・まぁ、その事は追々説明するから今は見たもの、聞いたもの、在りのまま受け入れて」

「は・・・はい」「何かよく分からんが、とりあえず肯定や、アカ姉」

「そう、助かるわ。それじゃ、これから岡田君と是沢君に戦ってもらいま―――」

『丁重にお断りさせて頂きます』

「あら、どうして？」

「メンドいから！」「以下同文！」

それを聞くなり、会長から笑顔が消え、そして―――

「・・・なら、私と遊び（戦い）ましょうか？」

「よし、是沢っ！！お前の成長した力、試してやろうっ！！」

「今度こそ負けんよっ！！岡田先輩っ！！」

「ふぅ、２人共素直で助かるわ」

『・・・・怖えぇ〜・・・・』

「あら、何か言った？」　『いえ、何でもありません』

「ならいいわ、それじゃ、二人とも。いつもの位置に着いて」

「（小声）てか、生徒会室に居たときは会長、引き下がったのに、今はあんな強気で・・今回どうしてだろうか、大和」

「（小声）多分、仕事モードに入ってしまったからやと思う。アカ姉、無駄に責任感強いから、仕事中は、キャラ変わるんや」

「（小声）何その端迷惑な性格」

「（小声）気にしちゃ負けネ」

「君たちまた何か言ったでしょ」　『何かの間違いです』

「あっそ、ならいいわ」

そんな事しているうちに二人は、この空間の真ん中のとこで向かい合っている。さっきまでふざけていた二人だが、そんな様子はまったくなく、だた、お互いに相手に意識を集中させているのがこちらからでも分かる。

「では、行きますっ！！　試合っ！！　開始っっ！！！」

『ダグラスッ！！サー・ラステジオッ！！！（開放、精霊騎士）』

『二クロスッ！！ラグナロク・ラジエルッ！！！（放天、終末天使の黙示録）』

この掛け声をきっかけに、この空間には並外れた魔力が溢れ出してきた。突風と化したそれは、瞬く間に、ボクたちの視界をさえぎる。そして、視界が回復する頃にはお互いにすごい事になっていた。岡田先輩は全身に炎を、まるで鎧のように纏い、右手からは長い剣が相手を示している。対して、是沢先輩は、黄金色の双翼が生え、左手にペンの付いた本を携えている。

ボクが訳のわからないまま、岡田先輩は剣を振り、炎を飛ばした。その炎が是沢先輩に当たる寸前、その翼で空へ飛び上がった。当たる事のない炎はそのまま飛び、消えた。

「やるなぁ、是沢」「いえいえ、そんなことないですよっ！！先輩い〜！！」

そして、是沢先輩は宙に浮いた状態で右手で十字を切った。そして、翼の周りにいくつもの小さな魔方陣ができ、その一つ一つから、光線が放たれた。その光線は、岡田先輩の居たところを集中的に打ち込んでいる。

「会長、もう止めさせて下さい！！　岡田先輩が死にますよ！！」

ボクの必死の訴えを、まるで聞いていないかのように流された。会長はただ、今の状況を見守っている。

「痛てて、今のはさすがに利いたな・・・・」

爆風の中、声のしたほうに振り向くと、岡田先輩が立っている。
もちろん無傷と言うわけではないが、確かに生きている。

「はい、二人とも。そこまでよ」

会長の一声でようやく、この試合は終了した。

戦闘予行・岡田VS是沢（後書き）

いかがでしたか？
「もっと、こうした方が良い」などの要望、感想など、何でもいいのでよろしくお願いします。

招かざる客

「さて、大まかな違いは分かったかしら？」

岡田先輩と是沢先輩との戦闘（会長曰く、魔法のお手本）が終わり、会長が話し始める。

「まぁ、大体は分かりましたけど・・・」

「そう、ではどこが違う？」

「ワシらが使う魔法は、何らかの物を使い、それを中心に術式を組んでいくためか、異常なほどの時間がかかるが、さっきの2人の魔法はただ、自分の魔力を具現化しただけやから、発現時間が短い点やな・・・あれ、肉体にえらい負担かかるやろ、アカ姉」

「そうね、相変わらず気持ち悪いぐらいの洞察力ね」

「お褒めに預かり光栄や」

「・・・さて、この魔法のことに戻るのだけれど。簡単に言えば、自分自身に眠る力を――」

「それ以上、喋るのは止めてもらおうか。本条茜」

後ろから、突然の声に会長は、扉の方角に振り返った。その表情には悲痛と恐怖が宿っている。

「おやおや、どうしたのかね、そんなに怯えて。」

「く・・・草月・・・監査官・・」

「どうして・・・どうしてあなたが、ここに居る！」

「なぜか、だって？決まっているじゃないか。主人に噛み付く飼い犬を始末しに来たのだよ」

「何・・・ですって・・・」

「まさか、気付かれなかった、とでも思ったかね。君たちのしていることは全てお見通しなのだよ。私のチカラを持ってすれば――――」

その瞬間、草月と呼ばれる人物の周りを炎と光の壁で囲まれた。当然、誰がやったのかは言うまでもない。気が付いて振り返ると、岡田先輩と是沢先輩がさっきの魔法を発動させている。

「成瀬君、翔！あなた達は逃げなさい！」

「でも、それじゃ・・・」

「良いから行きなさいっ！！ここで全滅しては駄目なのっ！！翔、分かってるわね」

「・・・・マサキ、行くで」

そう言って、ボクの手を強引に掴んで駆け出した。

「アカ姉、岡田さん、是沢さん。頼んだで・・・」

そんな、大和祈りに近い呟きも、ボクの耳には届かなかった・・・・

「岡田君、是沢君。巻き込んでしまって、ごめんなさい」

今の、私のはこれくらい謝罪の言葉しか思いつかない。でも、そんな言葉を彼らは望んでいなかった

「馬鹿か、本条。お前に振り回されるのなんて、今に始まったことじゃないんだよ」

「そうだよ、会長さん。さっさとコイツ倒して、後輩たちに植え付けた死亡フラグを改革してやるんだ。」

ああ、なんで今まで気が付かなかったのだろう。私には、こんなにも頼もしい仲間が居ることに。でも、今は感慨に耽っている暇はない。

「ええ、そうね。じゃあ、2人共。一気に行くわよっ！！」

「話はそれで終わりかね？」

その言葉が聞き届く頃には、草月の周りに囲んでいたものは全て吹き飛ばされていた。当然、この程度で彼を止められるとは思っていない。

「ふん。済んだようなら行かせてもらおうか・・・『バクルサッ！

！アルスラッド・レイブンッ！！（破壊始、失墜の黒烏）』」
その言葉とともに、草月の影から夥しい数の黒いカラスがでていきた。これが、彼のチカラであり、私にとってもっとも、断ち切りたい鎖でもある。
「残念ね。あなたを行かせるつもりはないわ。あなたはここで止めるっ！！
私はもうっ！あの頃の私じゃないっ！！」
正直、戦いたくなかった。全て、話し合いで済むと思っていた。でも。これは私だけの問題じゃない。守りたいものがあるから・・・だから、私は右手を上げ、自らの力の名を宣言した。
『ルピアノスッ！！アクラルド・アリアッ！！（創始、矛盾聖女）』
私の声に応じて、魔力が形を成し、具現化する。掲げた右手には私の杖がしっかりかりを握られ、私の体を、白いローブが包み込む。
どうか、このチカラが誰かを守る盾になればいいなぁ。そんな儚い希望を抱いて戦争が始まった・・・

招かざる客（後書き）

いかがでしたでしょうか？
感想や要望などありましたら、送ってください

そして、全ては・・・・（前書き）

今回は、詰め詰めで描いた為、読みずらいかもしれません

そして、全ては・・・・

『フェルオス・イフリートッ！！』

『ソルサル・フォリトッ！！』

岡田君の放った一閃は、巨大な炎の龍と成り、是沢君の翼の羽ばたきが幾つもの魔方陣を生み出し、そのさらに、一つ一つの魔方陣から多くの閃光が敵である、『草月』に襲い掛かる。

「ふん、とんだ茶番だな。」

草月は右手を掲げ、幾つものカラスを使い自らの盾とした。方や、全てを飲み込まんとする巨大な火炎の龍。方や、四面楚歌と言わんばかりの３６０度完全全方位攻撃型の閃光。通常で在れば、草月は何らかのダメージを受けてもおかしくない。そう、それば通常であるなら・・・

『フォール・レイブン』

その一言で、今まで、盾としての役割しか果たさなかったカラスが溶け合い、黒のベール状になったそれは、２人の放った攻撃を全てを飲み込んだ。

「その程度かね？生徒会諸君のチカラは。それでは、私に倒すどころか、傷一つとしてつけることなど――――」

「ええ、確かに無理ね、今の攻撃では。」

そう。まさにその時だった。草月は2人の攻撃を裁くのに集中しており、私の存在を認識できていなかった。だから彼に、今私が、彼の背後に大きく伸びた影の部分にいた事など知りもしないだろう。彼は、咄嗟に振り向いたがもう遅い。

「草月　迩条、これで終わりにしましょう・・・」

私は長杖を振り上げ、その末端を影の部分に叩きつけた。

『ラファルトッ！！』

私の発した言霊は、草月の周りのカラスや黒のベールの存在を否定し、現象を拒絶した。そして、そのせいで、行き場を失った莫大なエネルギーは、全て草月に降りかかる事になる。

「――――――――ッ！！」

当然、彼自身に成す術などあるはずもない。なぜなら、彼のチカラは私のアンチマジックにより発動を解かれたのだから。

衝撃が収束する頃には、岡田君と是沢君が勝ち誇った表情でこちらに来た。

「やったなっ！！本条！！」

「流石会長さんだぁ」

「いいえ。私は彼の魔法を解いただけよ。それに、２人が彼をうまく引き付けてくれていたから、奇襲が成功したの。ホントに、２人のお陰よ・・・」

「じゃあ、みんなの勝利ということで」

「そうね（そうだな）」

・・・これで、政府の人間が私たちの異常行動について、知る事は無いだろう。草月の性格だ、この事は誰にもしゃべってはいないと思うし・・・

「・・・勝利だと・・・笑わせる・・・」

そのどこまでも憎しみに染まった声は、私たちの耳に届いた後、振り返ることを余儀なくさせた。彼はそう、生きていた。もちろん、全身に深い傷は負ったものの、全て致命傷ではない

おそらく、咄嗟にカラスを何匹か出して、逃れたのだろう・・・

「万事休す、と言ったところね・・・」

もう私には、チカラは残っていない。当然、岡田君と是沢君も・・

・成す術がない今、私たちは、絶望に身を任せるままだった。
「どいつもこいつも・・・人の計画を台無しにしやがって・・・もういいっ。ここで、八つ裂きにしてくれるっ！！」
彼は残ったチカラを使い、魔法を発動しようとした、その時だった。

「待てや、アホ面」

草月の眼前には、さっき逃げていたはずの翔が、立っている。それを見て私は、考えるより口が動いていた。
「何やってるのっ！！逃げろっていったじゃない！！」
「まあまあ、そんな小言は後や、後」
「・・・誰だ、貴様」
「ワシか？ワシは、神獄学園生徒会『会計長』の大和や、とゆーても分からんか、アホやし」
「貴様もか・・・お前から先に血祭りにしてやろうかっ！！」
「やから、アホやゆーねん。そういうのは、自分の足元見てゆーもんや」
その言葉に従い、草月の足元を見ると、魔方陣が描かれていた。
「何だ・・・これは！」
「簡単に言えば、爆弾や。さっき、マサキと2人で術式組んで作ったヤツ。動いたら爆発するから、下手に動かんほうがええで。」
「キサマッ！！」
「そんな怖い顔すんなや。ワシは取り引きしようとしとるだけや」
「取り引きだとっ！！」
「せや」
そう言うと翔は、ポケットから小さな石ころを取り出した。
「ここに、その魔方陣の『コア』がある。これをお前さんにくれるわ。そのかわり、ここであった事、生徒会役員の異常行動に関してお前は、誰にも公表しないと『魔道契約』を結べ」

「そんな事、誰が―――」
「せんかったら、ずっとそのままやで」
「・・・わかった」
そう言って、草月は両手を上げ、そして―――
「とでも言うと思ったか」
その瞬間。翔が持っていた『コア』が草月の操るカラスに奪われた。
「フハハハハハハッ！！馬鹿めっ！！『コア』を見せたのが運の尽きだったなっ！！さぁ、我が分身よ。その『コア』を壊すがいいっ！！」
カラスを迷わず、そのくちばしで『コア』を粉々に砕いた。でも、その瞬間でさえ、翔の顔から笑みが絶える事はなかった。

「やから、アホなんや」

そう。『コア』こそ粉々に砕けたものの、魔方陣は未だ存在しており、消える事はなかった。
「なぜだっ！！なぜ、消えないっ！！」
「さっき言った『動いたら爆発する』・・・あれは、嘘や。正確には『魔法で何かを壊した時に、忘却魔法が発動する』、やで」
そして、魔方陣は大きく輝きだす。全てを包み込むように・・・
「貴様らああああああああああ～～～～～～～っ！！」
「アンタの敗因は、一つ。周りが見えずに、冷静な判断が出来んかったことや」
そして、草月は、光に包まれて、消えた・・・

そして、全ては・・・・（後書き）

いかがでしたか？
今回で、１の場面が終了しましたので
次回から、２の場面に入っていきます。
引き続き、感想や要望も待ってます。

第3話　過去との対峙（前書き）

ついに、構成段階その2です。

第３話　過去との対峙

「ハァ・・・・・ハァ・・・・・」

誰もいない見覚えのある学園の廊下を、ただ、ぼくは闇雲に走っている。

「ウォォー・・・・・・」

「くそっ！また奴か！！」

『奴』とはさっきから、ぼくを追いかけている、黒い影のような人型のことだ。遭ったときに気味が悪かったため、即座に異形のものと判断して、何発か『礫の魔法』を打ち込んだのだが、それらをうまい事吸収され、倒れないどころか、ぼくを認識するなり、追いかけてきた。だから今は逃げる事で手一杯である。・・・今になって思う、どこで選択をミスったのかと。

事の発端は、つい数分前。草月監査官という人と激戦を繰り広げた、数日後に行われた『生徒会定例会議』の時だった。

『またいつ、政府の人間が来るか分からないから、翔と成瀬君には早急に『バルシェ』を会得してもらいましょう！！』

この会長の一言からだった。当然、ぼくも大和も異論をない。特に、ぼくの場合は大和と忘却魔方陣を造る手伝いをしただけで、ずっと隠れていたから、尚の事何も出来なかったことが歯がゆかった。

ちなみに、『バルシェ』とは会長曰く『科学でも、魔法でもない、

人類に与えられた第三の知識』らしいけど、実質の所は不明。
まぁ、そんな事を考えてるうちに生徒会議室の中に本来、在るはずのないものがあった。
それは、出入り口とは別のドアがホワイトボードの向こうにあったのだ。
『これから、2人にはこのドアに入ってもらうわ。やることは単純に『このドアからゴールを目指す事』ゴールは自ずと分かるわ。じゃ、行ってらっしゃい』
と、言われながらドアの向こうへと出て行った。そして現在に至る。
「ゴールたって、どこに行けばいいんだ・・・」
走りながら呟いたところで何も変わらないのだけれど・・・
走る事に集中していて気が付かなかったけど、さっきまで単体だった黒い影がいつの間にか複数存在していた。しかも、移動する速度もだんだん速くなっている。
「あぁん、もうっ！！しつこい！！」
ぼくは、すぐに行動を止め、先ほど大量に生産しておいた『術式の種』を振り返り際にばら撒いた。いかに、速くなったとはいえ、やっと歩く速度ぐらいだ。これならいける。ぼくは、すぐさま詠唱を開始した。
『汝、闇を払うもの。我、闇を紡ぐもの。聖邪の輝石、アリアスの名の下に我が求めに応じよ』

徐々にチカラがぼくの体から、『術式の種』へと流れていく。始めは、少しずつだが時間に比例し、チカラが相を帯びる。ある程度のチカラが溜まり、術を発現する。

『アーシェアルブル・ボルスホーマット（出で奔れ、聖帝の王輪）』

蓄積されていたチカラが発現し、術者以外を排除する結界が現れた。

これで、奴らもこちらへ来る事は出来ないは――――

「ウォー・・・ウォ・・・」

そんな、有り得ないっ！！奴ら、結界を擦り抜けただと？！確かこの術は『他者との間に隔たりを作り、拒絶する魔法』のはずなのに！！

「く・・・くそぅ・・・・」

一度に『術式の種』を大量生産したのと、今の自分が知る最大の防御魔法のせいで、もう、体にチカラが入らない・・・

そうこうしているうちに、ぼくは奴らに取り囲まれてしまい、最終的には胸座を掴めれて掲げられ、万事休す、だ。

「ウォ・・・ウォ・・・」

ぼくはこいつらに殺されるのだろうか？また、何もできないまま中途半端なまま、終わるのだろうか・・・

「イ・・・イヤ・・・ダ」

ん？ぼくの声？　ぼくは声を発していないのに？

「モウ・・・ナニモ・・・・・デキ・・ナイ・・・イヤ・・・ダ」

ああ、そうか。今になってやっと理解した。こいつらは、ぼくを探していただけなんだ。

昔に、記憶の中の奥深くに捨てた『もう一人のぼく』。そして、もっとも忌まわしい過去の記憶の感情を持った、ぼくの闇。いや、違う。こいつは光だ。ぼくの方だった、闇だったのは・・・

「・・・そうだね。いつまでも・・・重い・・・荷物（感情）を・・・押し付けちゃ、だめ・・・だよね・・・」

そう、いつまでも逃げちゃ駄目だ。その思い一つで、右手を動かし、黒の影の胸に押し付けた。強く・・めり込むぐらいに・・・

「ねぇ・・・かえろう・・・ぼくと・・・いっしょに・・・」

右手は、黒のかげに入り込み、なにかを掴んだ。そして、それを、力の限りに引き抜いた。

「ウォォォォォォォォォォォォォォォ～～～～～～～～～～～～～～～～～～ッッ！！！！」

この咆哮と共に、黒の影たちは跡形もなく、消え去った。掲げられていたぼくの体は、へ垂れ込むように落ちた。強く握り締めた右手の中身を開いてみる。

開いた瞬間、それは輝き、見た事もない文字に変換された。読め

ないはずなのに。知らないはずなのに、読める。

「ユグ・・・・ユグラルト・ルーン・・・・・」

読み上げると、その文字は消えた。消えたというより、ぼくのなかで溶け合ったのかな?

訳はわからないけど、すごく体が重い。

「ハハ・・・・もう・・げんか・・・い」

そうしてぼくは、深い深い夢へと、落ちていった・・・・・

第３話　過去との対峙（後書き）

いかがでしたか？
まだ、うまくできていませんので
ご要望あれば、どしどしください

『バルシェ』考察

「う・・・・うん・・・・」

目が覚めると、いつもの生徒会室のいつもの席に腰掛けていた。
確かぼくは・・・・僕自身の中にいた、もう一人のぼくと対峙して、
それからその自分を受け入れて、それから――――

「あ、成瀬君。気が付いた？」

「はい・・・・まだ頭が混乱してますが・・・・」

「そう、まだ当分は安静にしててね。色々、気持ちを整理したほう
がいいと思うから」

「はい、それは良いんですけど・・・・」

「ん？何か聞きたい事でも？」

「はい、あれは一体何だったんでしょう？」

「ああ、あのドアの中で起きたことね。あのドアの中は、成瀬君自
身の受け入れる事が出来なかった『感情』が具現化した世界よ。そ
の人にとって、抹消したい事や逃げてしまいたい事を見せる世界。
そして、『バルシェ』を会得することが出来る唯一の方法よ。
元々、『バルシェ』というのは自分のなかにある真理、つまりは、
個々人の根源にあるイメージを具現化する知識のこと。一般論では、
『魔法』といわれがちなんだけど。
そもそも、魔法は科学と紙一重の知識なの。『主約聖書』にはこ

う記されてあったわ。
『科学があるから魔法は証明され、魔法があるから科学が存在できる』って。本来、この二つには大原則として『等価交換』が底面にあるわ。元素に例えると分かりやすいわね。『水素と酸素が化合して、水ができる』。この中で、『魔法』と呼ばれるのは『水素と酸素』。『科学』と呼ばれるのが、『化合し、水が出来る』ってとこ。科学では、元素がないと何も出来ないし、魔法では、魔力で別の空間から元素を取り出す事は出来るけど、それ以上の変化はできない。だから、『等価交換』が成立し、相反することになるの。
対して、バルシェは心のイメージを具現化する訳だから、無から有を生ずることと同じなの。そんなの、魔法にも科学にもできない。だから第三の知識ってわけ・・・」

長々とした会話に疲れたといわんばかりに会長は、背伸びをした。実質、会長が話してくれた事の２０％ぐらいしか分からなかったけど・・・

「で、君はなんて名前なの？」

「・・・会長、アルツハイマーにはまだ早いですよ」

「そうじゃないわよっ！！失礼な！！君の魔法名よ！！魔法名！！『バルシェ』の発動の際に、自分の世界と現実を繋げるための、ま・ほ・う・め・い！！」

「ああ・・・それなら、確か『ユグラルト・ルーン』だったと思います」

「『ユグラルト・ルーン』・・・か。和訳すると、『死戦の魔術師』ね。また厳ついものを・・・」

「・・・へぇ、そうなんだ・・・」

魔術師かぁ、ホントなんでこんなんに成るのだろう。出来ればもっとこう、やさしい感じが良かったなぁ・・・

「そういえば、大和は？」

「翔なら、とっくに帰ったわよ。ドアに入って2・3分で出てきたの。異常に早かったからビックリしちゃった。それで、少し休んで帰っちゃった」

「そうですか・・・・」

「ふふ、そういじけなくていいわよ。あの子、こういう精神的なことはとても強いの。だから、早かっただけだから」

「はぁ・・・それじゃ、そろそろ帰ります。」

「そう、明日はいつもの闘技場でビシバシ訓練するから、放課後、絶対に遅れないでよ！」

「分かりました」

そう言って、ぼくは立ち上がり、生徒会室を後にした・・・・

『バルシェ』考察（後書き）

これからも、頑張ります

「『死戦の魔術師』、か・・・・・」

成瀬君が部屋を出てすぐ、私はこんな事を呟いてみる。何だか、あまりいい気分でないのは確かね。

「相変わらず、アカ姉は変なとこに感情を移入される」

「あら、翔。居たのね」

さっきまで居なかったはずの翔の声が聞こえたけど、いつもこんな感じの神出鬼没なのであまり気にしない。

「で、どうしたんや。そんなに憂いて」

「別に、ただここまで『主約聖書』の予言通りだと気持ち悪くてね」

「ああ、『エデンの鍵』の出現についての記述か」

「ええ、『太陽は消え、ただ白く、荘厳な月は闇夜へと浮かび大地を照らせ。聖女、騎士、天使、道化は神の名を携えた魔術師に導かれ、扉を開く鍵を探せ。月が全て欠ける頃、封の鎖は砕かれる』・・・ここでの私たちの役割は、扉の鍵を探す事。でも、その鍵が何なのか分からないから駄目なんだけど・・・」

「簡単な話だ。神の名を携えた魔術師、かつて北欧神話の最高神にして、最も知識に対して貪欲とされた戦いと死と魔術の神『オーディン』の別称、『ユグ』の名を持つマサキが全てを導く。ワシ等は

ただそれに付いて行けばいい。」

「そうね・・・確かにそうね、『幻想道化』さん」

「魔法名で呼ぶなや、矛盾聖女。」

「はいはい、たまにはいいじゃない、こういうのも」

「・・・・せやな。もしかしたら、ワシ等はもう、ここには居れへんかもしれんし・・・」

「それでも良い。私が犠牲になって、この学園が守られるなら」

「すでに学園規模ではないけどな。それに、『私が』やのうて『ワシ等が』や。一人で背負うなや」

「そうね、主約聖書通りならあと1週間。この間に『エデンの鍵』が動き出す。なんとしても、止める。それが、私たちの役目なんだもの・・・」

「死んで止めても、オモロないから生きて帰ってくる。アカ姉はそんな気持ちが足りへんわ」

「そうね・・・」

今思えば、私は世界がどうこうよりも、自分の周りが壊れるのを恐れていたのかもしれない。

あと1週間。私は・・いや、私たちは、何を思い、どうするのか。全ては私たちの手の中に委ねられた・・・

主約聖書の予言（後書き）

よかったら、感想などよろしくです。

第4話　道化と魔術師

「さ、二人とも。位置に着いてちょうだい」

放課後、いつもの闘技場にぼくたち生徒会役員はいた。もちろん、今回も前回と同様、戦闘訓練で、だ。

「よ〜し、マサキよ。ワシとお前。どちらが強いかのう！」

「どっちでもいいよ、そんなの。予は『エデンの鍵』を壊せればいいのだから」

「ちぇ、つれないねぇ」

とかなんとか言いつつ、所定の位置に着き、各々の力を発現した。

『ローラルッ！！ゼルティア・シュバングッ！！（開演、幻想道化）』

『バルハラッ！！ユグラルト・ルーンッ！！（降臨、死戦の魔術師）』

2人の力が、魔力が、形となって相を帯びる。前は、端から見てるだけだったけど、この『バルシェ』はチカラを根こそぎ、奪い取られるような感じになる。吸い込まれそうで、でも、放っているようで。

それの感覚が終わる頃には、ぼくは右手に槍を持ち、二羽のカラスがぼくの周りを飛んでいる。

対して大和は、目のほうだけを銀色の仮面が覆い、白いフード付きのコートを着ており、被られているフードには、ウサギの耳とも思わせるような突起が髪のように後ろにたれている。

「よし、それじゃ2人共。チカラを理解するように、いろいろ暴れちゃいなさい！！」

「そんなこと言われても・・・」

確かに、なんとなくではあるが、曖昧に使い方が分かる気がする。でも、『理解するように』っていわれても・・・

「余所見は、いかんぞっ！！」

空中に駆け上がった大和は、ぼくの頭上から幾つものナイフを放った。当然、いきなりの事だったから、対応に遅れ、悲痛の表情を浮かべていたが、二羽のカラス達がそれを払い、ぼくを守ってくれた。

『しっかりしてくれ（しっかりしなよ）、マスター』

二羽（二人と言ったほうがいいかもしれない）が突然に、当たり前のように話しかけてきたため、ぼくも、大和も、目を丸くしている。

「マスターがそんなんだと、調子狂う」

「え～と・・・君たちは？」

「俺たちは・・・て、奴さんは話させてくれなそうだけど・・・」

そう。これは戦闘の訓練であったのを忘れていた。当然、無駄に洞察力の優れた大和がこんな絶好の隙を見逃すはずもなく、幾つものナイフを放った。

ぼくは、横に飛ぶ事で逃れたが、完全にとはいかなかった。

「ふーん。カラスがしゃべったのは驚いたけど、そんなんじゃワシは倒せんぞ」

確かに、ぼくと違い力の使い方を大和はよく理解している。このままでは勝機は薄い。

「マスター。このままでは勝てない。ここは一つ、うち等にまかせてくんない？」

「だから、君たちは何なんだっ！」

「うち等は、マスターの『記憶』と『思考』が具現化した姿。なーに、こんな奴に負けないから」

「・・・・・・」

信じていいのか、駄目なのかは分からないけど、自分の分身が『任せろ』といっている。

だったら、ぼくのやることは一つ――――――――――

「で、ぼくは、何をすればいい？」

第４話　道化と魔術師（後書き）

よかったら、感想やご要望などお願いします。

道化と魔術師　TAKE2

「我、世界を繋ぐ橋を造るもの。汝、世界の根源を抱くもの・・・・」

二羽のカラス（男口調が『ムギン』、女口調が『フニン』）が考えた作戦はこうだ。

『まず、俺とフニンで奴の視界を遮るから、その間にマスターは相手の動きを封じる術式を立ててくれ』

もちろんの事ではあるが、戦闘中にこんな会話ができる訳がない。これは、ぼくの能力と言うよりは、彼らの能力で、思考と記憶がぼくと完全にリンクされている為、声を上げることなく会話を成立させている。

そして今こうして、術式を立てているわけだが・・・

「マサキは、そこかっ！！」

こうもあっさり見破られ、ナイフの雨に晒されている今となっては逃げたり、応戦したりしながら地道に術式を組んでいる。てか、あいつ何本ナイフもってんだよ！？

『無限に出てくると思うわよ』

そこ、人の思考を呼んで回答しない！

『仕方ないでしょ、リンクしてるんだから』

ああ、そうでしたね・・・って、そんな事どうでもいいから、大和の気を逸らしてよ！

『やってるんだけど、アイツ隙だらけのようで全然隙がないのよ。なんかこう、得体の知れないものを相手にしているようで』

ああ、そうなんだ・・・

『今、ムギンがうまくかく乱させているけど、長くは持たないのが現状。だから、早めに術を組みなさい』

はいはい・・・

ここで、フニンからの会話が切れた。実質、ぼく自身、『バルシェ』のチカラを完全にマスターしたわけではない。それでも、やらなきゃいけないのだろうけど・・・

「我が、賜いし知識は他がために。汝の魔の契約が己が為であるならば、我が求めに応じよ」

術式の種を使う事もなく、自らの心の形を具現化する『バルシェ』。ぼくの場合は、何がどうなのかよく分かっていない。自分が何なのかさえも。だから、一度自分や彼らと、向き合う必要がある。もう、誰も、失いたくないから・・・

「そろそろ、終わりにしようや、マサキ」

そこで大和は右手を掲げた。それと同時に、今まで地面に刺さって、放置されていたナイフが一斉に浮かんで、ぼくに向かい、集中

的に放たれた。

「それは、ぼくも同意見だよ。」

放たれた瞬間、全てのナイフはその軌道上に静止し、動かない。

『ルーンの第３７番、死鬼の縛鎖を行使する』

そう、この現象はぼくが今まで組んだ術式が発動したものだ。これは、あらゆるものの力を封じ、万物を縛する鎖『死鬼の縛鎖』を召喚する魔法だ。

当然、ここでのチカラの権化である大和はその鎖に縛される。そこに、何の例外もない。

「く・・・くそぅ・・・・・」

ここで、ぼくは彼に接近し、手に持った槍を彼に向け、一言

「これで、チェックメイト。だね」

大和は、ただ、鎖に身を任せ、うな垂れている居るしかなかった・・・

道化と魔術師　ＴＡＫＥ２（後書き）

宜しければ、感想などお願いします

戦闘予行、終了

「これで、チェックメイト、だね」

ぼくの発した言葉は大和に届いたらしく、ただうな垂れながらも首を縦に振った。

『これで、終わりか、マスター』

「ああ、なんとかね」

役目を終え、さっきまで飛び立っていたカラスが戻ってきた。一応、これで、終わり。

早く帰りたいな・・・なんて考えているときだった。

「ついに、戯曲の舞台より幕がおりる。誰もが知らない結末となって」

「――――――――！」

気が付いたときにはもう遅かった。背後から聞こえた声は、伴って金属の鈍いも聞こえた。

そう、大和が後ろに居たのだ！！その手に握られた拳銃をぼくの頭を捕らえて。それに気が付いて前を見ると、鎖にとらわれている大和の体は、まるで霧のように消えてしまった

「う・・・うそ・・・」

「何を驚く？ワシは『幻想道化』だぞ？自分の幻覚を作るくらい、わけない。元々、このチカラに実体など存在しないのだから」

ただ、その言葉から何がどうなのかと言うのは、理解できない。頭の中が白いインクが滲んだようだ。

「では、来世まで、ごきげんよう」

大和は、ゆっくりと指を引き金に掛け、そして――――

バンッ！！

「・・・・・・え？」

確かに、大和は引き金を引いたはずだ。でも、なぜ、『ぼくは生きている』？

「やれやれ。戦闘の予行だと言ったのに、なに絶望しているんや」

「・・・・あ・・・・・」

「まったく。大体、ワシがマサキを殺すわけないやろ？ただの演出や、演出」

力が抜けて、地面にへたり込んでしまった。今は、とにかく泣きそう・・・

「演出にはやり過ぎ、大和」

「是沢さん、居たんですね。いつから？」

「ついさっき。女の子達の黄色い声援や、告白やサインやらもう、大変なんだよ」

「確かに、男の自分が言うのもなんですが、かっこいいと思います」

「ハハッそんなことないさ」

「謙遜してる辺りが、自棄に腹立つわー（怒）」

「はいはい、そこ。おしゃべりしないで、成瀬君を運びなさい。放心状態じゃない。」

「そうだね、アカ姉。少しやり過ぎた。だから、少しだけのお詫びをこめて・・・」

そう言って、大和はへ垂れ込んでいるぼくの頭に手を置いた。

「せめて、いい夢でも・・・」

その言葉が聞こえたかどうか、そんなことは些細な問題でしかない。なぜなら、その頃には、ぼくはもう、夢の世界へと旅立っているのだから・・・

戦闘予行、終了（後書き）

次回は、成瀬君の夢の世界をご案内します。
感想などもぜひっ！！

夢の世界（前書き）

今回から、追憶編のスタートです

夢の世界

「・・・・お・・・・ろ・・・」

どこからか声が聞こえる。ぼくはまだ眠って居たいのに。

「いい加減、起きろ！マスター！！」

「・・・ハッ」

気が付いて、と言うよりは眠りから覚めると、見知らぬ男がぼくの両肩を掴んでいた。そして、もうひとつ気が付いた事が、さっきまで横になっていたはずなのに、椅子に座らされている、と言う事だ。

「・・・君、何処かであったっけ？」

「はぁ・・・まだ意識がはっきりしておられない様だ・・・・」

「アンタが、無理やり起こすからいけないんでしょう？ムギン」

ここでも、また見知らぬ女が腕を組んで、傍観している。

「フニン。お前が『早くして〜』とか言ったのを、もう忘れたのか・・・」

ムギン、フニン・・・ああ、ぼくの発動時に出てきたあのカラスたちかぁ〜・・・って

「はあああああああああああっっっっ〜〜〜〜〜〜！！！！！」

突然、大声を上げたから、２人は耳に栓をしている

「マスター。いちいちリアクションが大きいのは、よくないぞ」

「そんなことは、どうでもいいの！！何、これ！！どんな罰ゲーム？！！！」

「罰ゲームではないわ、対面よ。てか、落ち着きなさいよ、見苦しい」

「で、でも、なんで？カラスだったたのに！なんで、人型に？！」

「当然じゃない。だってここは・・・・・」

『マスターの心の世界だから』

２人とも、揃って発現する辺りが、なんとな〜く、そんな感じがするけど・・・

まぁ、それなら納得か。言われてみれば、こんな玉座に自分が座るわけないし、玉座の前に大きな泉を作ったこともなかったし・・・しかも、心の中とはいえ、こんな大きな屋敷（お城かもしれない）に、あたかも王様なんかが出てくる漫画での、謁見場みたいなのはさすがにないだろう・・・・

「で、何でぼくは、ここに？」

「それなのだが、これからマスターに、聞いてもらいたい事がある」

「なにそれ？」

ぼくが、そういうと、ムギンとフニンはぼくが座っている玉座の前に跪いて、こう言ってのけた

『エデンの鍵についての、真実でございます』

夢の世界（後書き）

いかがでしたか？
ご意見、ご要望あれば、お願いします

追憶その１　鍵の創り手（前書き）

追憶その１　鍵の創り手

「てか、エデンの鍵に、真実もくそもないと思うのだけれど・・・」

冷静に突っ込みをいれてみたけれど、この２人、相変わらず跪いたままだ。

「『エデンの鍵の真実』・・・と言うよりは『エデンの鍵が創られた時の、真実』と言った方がいいかしら」

フニンがそれを言うと、２人は跪くのを止め、どこから出したのか分からない椅子に腰掛けていた。しかも、テーブルはあるわ、その上には紅茶とお菓子があるわで・・・そんな光景を見ると、本当に自分の心の世界なんだなぁと感心してしまう。当然、ぼくもその丸いテーブルを囲んでいるわけなのだが・・・いまいち、馴染めていないない様な気がする・・・

「ふーん。相変わらず訳が分からないのだけれど、興味あるから、聞くよ」

「わかったよ。マスター」

そういうと、フニンがテーブルの上に手を出した。

『ルーンの第４０番、記憶鏡を行使する』

それと同時に、手の平から水晶のような鏡が出てきた。

「この鏡は、フニンが管理している記憶を画像で紹介する、デバイ

スだと思ってくれればいい。さて、本題に入ろうか・・・」
「元々エデンの鍵は、殺戮兵器なんかじゃなかった。本来は、人の心を安定させるための力を持った装置だったんだ」
「待って。それだったら、なんで先代人類を滅ぼす事ができたんだよ？」
「人の話を聞いていなかったのか？『人の心を安定させる』ということは『人の心を壊す』ことだってできるんだ。むしろ、後者の方が容易い。」
そうだったのか・・・それなら確かに、岡田先輩や会長が言っていた『神にも等しいチカラを持った兵器』と言うのも頷ける。心を操る。それが出来れば、知能を持ったものなら抗う事ができない。機械でもない限りは・・・
「そして、もう一つ。ここからは、エデンの鍵を創った者たちの事になる。
エデンの鍵は、当時の最高位の『バルシェラー』が5人で創ったものだが――――」
「ストップ。今まで疑問だったけど、どうしてそこまでエデンの鍵について知っている？」
「当然だろう？俺たち2人もそれに立ち会ったんだから」
「それじゃ、2人が5人の内の最高位のバルシェラーってこと？」
「いや、違う。『俺たち自身』ではなく『俺たちのマスター』が、

だ」

「・・・・・えっ、それって・・・・・」

「そう。『アナタ』が『最高位のバルシェラー』なのです。ユグラルト・ルーン様」

「『有り得ない』わけではない。少なくとも、マスターは5人のバルシェラーをすでにご存知のはず」

「そんな・・・そんなことが・・・」

「それって・・・・・まさかっ！！」

「そう。『この学園の生徒会役員』こそ『最高位のバルシェラー』であり、『エデンの鍵の製創メンバー』なのです。」

「う・・・・嘘だ・・・・そんな偶然が・・・・」

「偶然は、時として必然と捉えることもできる。この学園に『エデンの鍵』の製創メンバーの生まれ変わりが来るということは、決定事項だった。その要因が『エデンの鍵によるものなのか』、あるいは『日本政府の策略だったのか』は不明だが・・・」

会長が、ぼくを選んだのはそれ相応の理由があるとは思っていたけど、そんなことがあったなんて・・・今、自分は何であるかすら、有耶無耶になりつつある。

「そこで、だ。マスターに頼みたいことがある」

「・・・・・・何・・・・・」

『エデンの鍵を、止めてくれ』

その声は、どこか切なく、儚げに、ぼくの中へと入って行った・・・・・・

追憶その１　鍵の創り手（後書き）

いかがでしたか？追憶編は、さらに続きます。
お楽しみに。コメント待ってます。

追憶その２　ぼくの過去

「・・・エデンの鍵を止めるって、どういう事だよ・・・」

エデンの鍵の製創メンバーとか、色々な情報が入ってきて、こんがらがっている今のぼくには理解が及ばない。

「エデンの鍵は今、深い闇の中に居る。何千年もの長い間、封印され続け、その間に蓄えたチカラは、想像を絶している。俺たちには判るんだっ！あれが、再び、この世界に出現すれば、間違いなく、世界は崩壊する。当然、アレに人を殺せるチカラはない。だが、アレのチカラで、人類は殺し合いを始める！！　絶っっ対にっ、だ！！　もう俺たちは、目の前で、何かを失いたくないんだ・・・・」

ムギンが声にならない、悲痛な叫びを上げている。そのどうしようもなく、救われないような様は、まるで、６年前の自分を見ているようで、心臓が、締め付けられる。

６年前、ぼくは、家族を失った。ぼくが、学校に行っている間に、愉快犯の仕業でぼくの両親と、当時１歳だった弟が、惨殺されていた。それはもう、人の形状を保った居ないほどだった、と後で聞いた。　そのときのぼくも、きっと、いまのムギンと似たような、悲鳴を上げていたと思う。ただ、胸の内にできた穴に、どろどろになった感情が、溢れそうなぐらいになって、ただ、怖くて。ただ、憎たらしくて。だけど、汚れ切れなくて・・・

「・・・・・・ぼくは・・・・・どうしたら・・・・・・・」

こんな些細な呟きさえ、きっと大したチカラは持っていない・・・

・
そのことが、無性に、歯がゆい。

「だから、マスターに止めてもらいたいっ！！　エデンの鍵は、元々、マスター達が創ったものだ。だから、壊す事だって――――――」

「勝手なこと言うなっっ！！！」

「・・・・・え？」

違う。やめろ。ぼくは・・・ぼくはそんなこと言いたくない！

「ぼくに、そんなことできるわけないじゃないか・・・　ぼくはただ、平穏に暮らせて、平穏で当たり前な生活を、送りたいだけなのに・・・」

なんでだよ・・・　そんなに、ぼくを、追い詰めるっ！！　ぼくが、何をしたって言うんだっ！！！」

やめろ、イヤだ。違う、こんなんじゃ。それだけが、ぼくの今の心にぐるぐるとループしている。やめたくても、口が勝手に動いて、ぼくの闇が、滲んで・・・ああ・・・

「・・・・マスター、先に非礼を詫びて起きます」

そう言うと、今まで沈黙を貫いていたフニンが立ち上がり、ぼくの前まで来た。そして――――

バチンッ！！

乾いた音が、辺りに響き渡った。ぼくは、右頬に残った、赤い熱を感じていた。

「一人で、被害者ぶるなっ！！

さっきから、聞いていれば、自分だけが不幸みたいな言い方してっ！！

ムギンが、どんな思いで、言ってるのかも知らないくせに・・・

何も・・・知らないくせに・・・　ムギンは――――」

「もう寄せ。フニン」

間から、ムギンが入ってきて、彼女を引き止める。

「ムギンは・・・・・・ムギンは・・・・・」

止めに入ったムギンの胸で、彼女は、声を殺して泣いている。

その時初めて気が付いた。ぼくはあれから強くなったと思っていたけど、ただ、感情に鈍感になっていただけだった、って。　だって、そう。自分さえ傷つけて、しまったのだから・・・

「すまない、マスター。また落ち着いたら、呼ぶ。だから今日のところは・・・・」

そう言って、ムギンは、フニンを抱きしめたまま、指を鳴らした。辺りは、ぼくの視界から遠ざかるように、進んでいく。

「・・・・ぼくは・・・ただ・・・・」

かみ締めた感情も、きっと、こんな感じに遠ざかっていったのだろう。

今はただ、過ぎ去っていく景色に、身を任せるままだった・・・・

追憶その２　ぼくの過去（後書き）

いかかでしたか？

今回での感想、待ってます・・・

追憶その３　鍵と扉

「ぼくは・・・・・ただ・・・・」

辺りの景色は、ぼくを背後から追い越していくかのように、進んでいる。

『ムギンの気も知らないでっ！！』　フニンのその言葉がいつまで経っても、頭の中をぐるぐると回っている。

なんであの時、ぼくはあんな事を言ってしまったのだろう？

もっと、言い用があったはずなのに。

どうして？　ぼくは、ただ、ひたすらにそれを迷走している。

――――――心の屋敷――――――

「ぐずっ・・・うぇ・・・・」

「もう泣くなよ、フニン」

俺は、マスターを退席させた後、ずっと、フニンに胸を貸して、泣いているフニンを抱きしめていた。

「ごめん・・・ウチ・・・・あんな・・・こと・・・・」

「フニンの所為じゃない。俺が、俺がもっとうまく言っていればよかったんだ」

「ううん・・・ちがう・・・・ウチは・・・・ただ・・・・・」

フニンの言いたいことは分かる。フニンはただ、マスターのことを止めたかっただけだ。

けど、うまく言い出せなくて、自分でも言いたくない事を口走ってしまっただけ。

だから、誰にも、罪なんてない。マスターにも、フニンにも。

悪いのは、いつも――――

『なんか、辛気臭いなぁ、君たち』

後ろからの声で、誰かがここに居る事に気が付いた。この声からして、後ろを向いて、姿を確認するまでもないだろう。

「なぜこんなところに居る、ピエロ」

『相変わらず、釣れないんだねぇ、君は。いや、ここでは君たちと言っておこうか』

「こちらが質問しているのは、こちらだ。そして、お前はそれに答える義務がある。」

『なぜ？って言われても、ボクはただ、我らがマスターの命に従っただけの事。

それに、ボクにはちゃんと『ロキ』と言う名があるんだ。それを、

ピエロという安易な言葉で、言われるのは侵害だねぇ』
「マスター？・・・ああ、ゼルティアか。」
『そう。マスターはこういった。『ここの主人に安らかな夢へと誘え』、とね。でも、君たちが入ってきたお陰で、その命も果たせなかったのだけれど』
「そうか。それでここまで愚痴を言いに着たと。大した暇人だな」
『う〜ん。否定はしないが、それだけの用でここにきたわけじゃないよ』
「どういうことだ！？」
『おっと、怖い怖い。そう威嚇すんなってぇ。ボク、こう見えても気が小さいんだから』
「よくもまぁ、そんな嘘が言えたものだ。かつて、１０万の軍隊を1時間足らずで殲滅した奴の言葉とは思えん」
『そりゃそうさ。あの時は若かったからねぇ』
「さっさと用件を言え。そうでないと、二度と、世界に存在できないようにしてやる！」
『はいはい、せっかちなやつ。まぁ、いいや。話と言うのは他でもない。
『アレが、復活した』。それだけ』

「待て、アレとは・・・まさかっ！！」

『そう。エデンの鍵と対になるもの。『ゲート・オブ・エデン』のこと。ようやく、こちらに現れた、と言うわけさ』

「だが、なぜだ？　この時代でなくとも、現れる条件など揃っていたじゃないか。それが、なぜ今になって・・・」

『さぁ？　ボクに聞かれても、ねぇ。それは、自分で考えな。それじゃ、確かに伝えたからな。ボクはこれで、失礼するよ』

そう言ってピエロの、いやロキの気配は消えた。

「扉が・・・現れたのね・・・・」

「ああ、そうみたいだ」

「また、誰かが死ぬのかな？」

「そうならないように、俺たちがやるんだろう」

「そうだね・・・・」

フニンは、そう言って眠りについた。　鍵と扉。

この2つが、どういう事を意味しているのか、そんなの当の昔に判っている。

「絶対に、止めてみせる・・・」

屋敷の外は、きれいな星空だった

追憶その３　鍵と扉（後書き）

よろしければ、感想、よろしくお願いします

鍵の出現のサイン

「・・・・・えらく疑問なのは、なぜワシがマサキの介護をせにゃならん・・・・・」

そんな事を、保健室のベットの隣にある椅子に腰掛けているワシは自分自身に問いかけるように呟いてみる。　まぁ、マサキがこうして倒れて、保健室送りにしたんも、こうしてベットに横にならすような事したんも、ワシやけど。責任あるけどな、何か、違うねん。と、文句を言ったところで何も変わらんし、アカ姉も岡田さんも是沢さんも、いろいろ用事あるらしいし。

「・・・・・ん・・・・うん・・・・・」

「おお、マサキ。気ぃ付いたか？」

「あれ・・・・ここ・・・・は？」

「保健室や。マサキが倒れたさかい、みんなでここまで運んできたんや。」

「そう・・・・なんだ・・・・・」

「まぁ、せないな事はどうでもええ。一時は体休めたほうがええしな。初めてのバルシェは体にごっつい負担掛かるらしいし。」

「お前は、大丈夫なのか？」

「ワシは、人より丈夫やさかい、心配すんなや。」

「そう・・・なのかな・・・」

「せやせや。今日は皆既日食見れるらしいて。気分も良うなっている事やし、後で、見にいかへん？」

「いいけど・・・・授業が・・・」

「安心せい。今はちょうど昼休み。そんで皆既日食も、後数分を待つばかり。みんな外出たり、窓から見るなりしてるって。」

「・・・・わかった。」

「良し。なら、行こか」

そう言って、ワシとマサキは、保健室を出て行った・・・・

ーーーーー屋上にてーーーーーーー

「お、大分始まってるな」

「うん・・・」

屋上に出てきたはいいが、大事な事に、サングラスを持ってくるのを忘れたため、屋上から下を見てその明るさで、日食を拝んでいる。

「何か・・・・・日食ってさ。昔は太陽が食べられて、二度と戻っ

てこないと思ってたんだよね。
でも、実際はそうじゃなくて、太陽と月が重なって、隠れてるだけなのに」
「ふーん。頭脳明晰なマサキもそんなアホみたいなこと言うときもあったんやなぁ」
「でもさ、今回の日食は極めて稀な、完全日食なんだって」
「ん？　どゆこと？」
「あの、太陽の周りのコロナが見えなくなるって行ってた」
「太陽のコロナが見えなく・・・・・・ハッ！！」
ここで、ワシはあるとんでもない事を思い出してしまった！！
アカ姉は言った『太陽は消え、ただ白く、荘厳な月は闇夜へと浮かび大地を照らせ。』
主約聖書の予言が今、現実のものになろうってのか・・・・・・
「どうしたの？　大和―――――」
「やばいでっ！！！　マサキ！！　鍵がっ！！　エデンの鍵が、復活するっ！！！！」
勢いよくマサキの方を振り返ると、マサキは今まで以上に、困惑の表情を浮かべていた・・・・・

鍵の出現のサイン（後書き）

いかがでしたか？
感想、よろしくです。

エデンの鍵撲滅大作戦！！

皆既日食が始まって2・3分した頃、ボクは大和に手を引かれながら、校内を蹂躙していた。

「どうしたって言うんだよっ！　大和っ！！」

手を引かれてはいるが、実際のとこ、エデンの鍵が復活するしか聞いていないボクは、曖昧になりながらも、大和に問いかける。

「ふーむ。これは至極、不味い事になってしまった・・・・」

「どういうことっ！？」

「端的に、しかも分かりやすく言うとだな、あの皆既日食がエデンの鍵を出現させるための儀式だって事や」

「そうなの？」

「ああ。多分アカ姉も気付いてると思うから、とりあえず合流せにゃ・・・・まぁ、幸いなことなのか不幸なことなのかは分からんが、見たとこワシ等を除いた生徒が全員消えているんや・・・・」

「それだったら、会長がいない可能性もあるんじゃ？」

「それはない。アカ姉は腐っても、ここの生徒会長でアンチマジック使い。おそらくこれは人為的に発現された、強力な人払いの結界やから、アカ姉が飲まれる事はまずありえん」

「・・・・・」

「とにかく、生徒会室へ行かんと――――――」

そう言って、通路を右に曲がろうとした、次の瞬間――――

ガツンッ！！！

何かとぶつかり、大和とボクは尻餅をついた。そして、そのぶつかったものは・・・・

「まったくっ！！　危ないのよっ！！」

「おお、アカ姉。生きとったか！」

「まぁ、お陰様でね」

「か・・・・会長だったんですか・・・・・」

「ああ、成瀬君も居たの？　探す手間が省けてよかったわ。二人共、これから私と一緒にグラウンドまで来て頂戴。　そこで、始めるわよ・・・・・」

「ちなみに聞くが、何を？」

「決まっているじゃない！」

そう言うと、会長は勢い良く立ち上がり、こう一言言ってのけた。

『エデンの鍵、撲滅、大作戦よっ！！！！！！！！！』

エデンの鍵撲滅大作戦！！（後書き）

いかがでしたか？
いよいよ、ラストスパートになって来ました。
感想等、よろしくです。

作戦　決行！！

エデンの鍵撲滅大作戦。会長がそう銘打ってはいるが、いつもの通り、いや当然のごとく何のことなのか話してくれないままに、ボク達３人は、校内のグラウンドへとたどり着いた。

「かーいちょーさーん」

グラウンドの中央では、是沢先輩が手を大きく振っており、その横に居た岡田先輩も、こちらに振り返った。

「2人共、よかった。これで全員ね？」

「ああ」

「じゃあ皆、これから私が言う事を心して聞いて頂戴」

そう言って会長は、他の４人の前に立った。

「いい？　これから私たちは、エデンの鍵の捜索に入ります。勘のいい人は気付いているかもだけど、今回の捜索で、政府サイドの人間が介入して来るのはほぼ間違いないわ。当然、戦闘にも入るし、過激な争奪戦になるでしょう。でも、私たちには負けられない理由がある。もし、エデンの鍵が政府に渡れば、とんでもない事になるわ。おそらく、世界的な戦争になると思う。それだけは、決して阻止しなくてはならない。そこはいいわね？」

「ああ」　「はい」　「うん」　「はいはい」

「だから、鍵を先取し、破壊する。そのための役割分担も決めてあるわ。
まず、私と翔は、敵を引き付けるためにわざとらしくエデンの鍵を捜索する振りをする。その間に敵を引き付け、撃退。　あとの岡田君、是沢君は成瀬君の直感に従って、鍵の捜索を『隠密』に行って頂戴。」

「待ってください！」

「どうしたの？　成瀬君？」

「どうして、ボクなんですか？！」

「・・・・・これは君にしか、できないことだからよ。安心して。君は絶っっ対に、見つけることができる。私を信じて。皆を信じて。そして、あなた自身を信じなさい。　いいわね？」

「・・・・・・・」

ボクは返答することができなかった。ただ不安で、怖くて。どうしたら良いのかさえ分からない。

「岡田君。あとの事は、任せたわ」

「ああ、本条も気を付けてな」

「うん、安心して。私は大丈夫だから。それに、この争奪戦が終わったら、岡田君に言いたい事もあるし・・・」

会長はそう言いながら、眼をそむける。

「さぁ！！　各自、準備はいいっ？！」

そして――――――――

「解っ散！！！！」

ボク等はそれぞれの場所へと、馳せて言った。

作戦　決行！！（後書き）

いかがでしたか？

感想等、よろしくです

あかねアリア　PART1

「さて、皆行った事だし。翔、そろそろ始めるわよ」

成瀬君を含めた3人を出払ってから、私は翔に話しかけた。

「えー、めんどくさいー」

「そう、じゃあこれからは、君の部屋にあるパソコンは没収ね」

「誠心誠意、遣らせていただきます。茜　お嬢様」

「初めからそうすれば良いのに・・・・・・」

なんて小言を言っているうちに、翔は自らのバルシェを発動していた。白いフード付きのロングコートはふわりと翻り、顔に付けた銀色の仮面は、月に映えている。

『幻想戯曲第3章第2節　『操られる人形使い』、開演』

翔がそう言うと、薄い霧のようなベールが辺りに立ち込めた。

「まぁ、これで敵さんはワシらのおるここ（グラウンド）に来るやろ。そうなったらアカ姉、あとは頼むわ」

「君は戦わないの？」

「くぅ、戦いたい。戦いたいさ。けど、この空間を維持するには繊細なプログラミングが必要でー」

「要するに、戦いたくないわけね」

「そうそう・・・って、なんでや？！」

「あら違った？」

「違わない」

「そう。じゃ、帰ったらパソコンに別れを言っておくのね。でないと―――――」

『おお？　弱そうなのが居るじゃねーか』

霧の中から、いや前方から声が聞こえた。　その声の主を探していると、黒のスーツを着た人影が二つ、姿を見せた。

「だれっ？！」

「おお、威勢のいいお嬢さんだなぁ、こりゃ。ハハッ」

「誰と聞いていているのか分からないの？」

「ん？　ああ、悪い悪い。自己紹介が遅れて。

俺は、イプシロン。で、こっちの無口の木偶の坊がミューだ。予想通り、政府の『エデンの鍵捜索班』だ。」

「・・・・・・」

小柄な男は、ヘラヘラ笑いながらそう言い、ミューと呼ばれたものは、そのまま無口だ。

「さて、お前達の自己紹介は・・・・・と言いたいとこだが、これから死ぬ奴の名前なんてどうでもいいか」

「なんですってっ！！」

「くっくっく。さぁ、とっとと始めようぜ！　鍵を掛けた、殺し合いをよぉ」

そして、私は一次戦を開始した。

まさきマジシャン　PART1

白く、荘厳で大きな月が現れてから一体どれほどの時間が経っているのだろう？

なんて事を思いながら、ボクと是沢先輩と岡田先輩は校内の廊下を歩いていた。

「是沢先輩・・・・」

「どうした、成るチャン？」

「ボク等は、何処へ向かっているのですか？」

「？　成るチャン、いい事を教えよう」

「なんですか？」

「俺に聞くな」

「・・・・・岡田先輩ー」

「冗談っ！　冗談だよ～！成るチャン」

「そうですか？てっきり職務を放棄したのかと思いました」

「う～ん。放棄したいのは山々なのだが・・・・」

「岡田先輩ー」

「嘘！　シゴトシタクテタマラナイナァー」

「カタコトですよ？」

「気にするな、成瀬。是沢はそういう奴だ。まぁ、この状況下では、いいムードメーカーだけどな」

「そうそう！」

「・・・で、ボク等は何処に？」

「スルーかよ・・・・」

「それはだな、お前が決めてくれ」

「・・・・会長と言い、岡田先輩といい、なんでボクなんですか？」

「それはな、お前が俺達の中で最も『魔術』に長けているからだ」

「・・・・まぁー、そうかもですけど」

「ここは、お前のチカラで、な？」

「・・・・・気は進みませんが、分かりました。遣ってみます」

そう言って、ボクは自らのチカラを発現させる。

『バルハラ、ユグラルト・ルーン』

その言葉とともに、ボクの手に槍が握られ、ムギンとフニンが姿を現す。

「呼んだか？　マスター」

「うん、ちょっと頼まれてほしくて・・・その」

「ふん、ウチはアンタを許したわけじゃ無いんだからねっ！・・・でも・・・どうしてもって言うなら手伝う上げなくも無いわよっ！」

「・・・・二人共、ありがとう」

「ああ」　「ふん！　別にアンタの為じゃ無いんだからねっ！！」

「それじゃ、行くよ」

そう言って、ボクは槍を両手で持ち、先端を地面に叩きつける。

「『1、我は光を探すもの』

『2、我は道を探すもの』

『3、我は星を探すもの』

三つの方角を射し、何れともなる黄金郷の扉を示せ」

『ルーンの77番、『導きの羅針盤』を行使する』

それと同時に、辺りの空間はゆがみ、異なる世界から黄金の羅針盤が現れた。

「これで、分かるのか？成瀬」

「ええ、おそらくは・・・・」

「まぁいい。とりあえずこれが射すほうへ、行ってみるぞ！」

そう言って、ボク等は急いで、羅針盤の示す南西へと向かった。

まさきマジシャン　PART2

「で、ここが・・・・そうなのか？」

岡田先輩が、唖然とした様子で、ボクに問いかける。

「はい・・・・間違いは・・・・・無いと思いますけど・・・・・」

正直、ボクとしても信じられずに居た。

なぜなら、本来『エデンの鍵』を示しているはずの羅針盤が、ボク達の目の前の、『生徒会役員室』を指しているからだ！

「成るチャン、これはどうかねぇ・・・」

「と、言われても・・・ムギン、フニン。ここで合ってる・・・よね？」

『ああ、間違いは無いと思うぞ。その羅針盤に限っては』

『そうね。何だかんだ言って、その羅針盤は真実しか示さないようになってるから、多分・・・』

「まぁ、そんな事はいい。・・・成瀬、お前から入れ」

「いやですよ。ここは年長の岡田先輩が行くべきです」

「そうだ、そうだー」

「いやいや、成瀬の羅針盤がここまで導いたんだ。ここまで来れば、最後まで遣りきるべきだ」

「そうだ、そうだー」

『・・・・・・』

ボクと岡田先輩は、横で相槌を打っている是沢先輩を、湿った目線を送って、二人揃ってこういった。

『じゃ、間をとって是沢（先輩）が行け！（行くべきです！）』

「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇええええええええ！！！」

是沢先輩の絶叫が辺りに響き渡る。

「無理無理無理ッ！！　絶っっ対、無理！」

「どうした、こういうのは得意だろう？」

「そうですけど、ほら、あれだよ、ここは成るチャンが適役だから、な？」

「そういう訳だ。成瀬、行って来い」

「・・・・・・はい・・・」

なんというか、いい感じに乗せられたような気がする。でもまぁ、ここで立ち止まってたら、色々と面倒だし、会長や大和の詳細も心配だし。

「じゃ、行きますよ」

そう言って、ボクは引き戸に手を掛け、ゆっくりと中を開いた。

そして――――――

「っ誰だっ！！！」

その瞬間、ここに居る全員が身構える。そして、ボク等の視線を送る先には、クリーム色の髪のポニーテイルの少女が居た。

少女は窓から漏れた月明かりを見つめており、ボク等の声に気が付いたのか、こちらに眼を向けた。

『お・・・・おい！　マスターッ　あの子は！！』

『嘘、な・・・なんでよっ！！』

ボクの肩に止まっていたムギンとフニンが揃って驚愕している。

少女の方も、ボクの顔を見て、息を呑んでいる。

「―――――っ！！」

そして、少女は、とんでもない事を口にした！！

「・・・・・兄・・・・・さん？・・・・」

まさきマジシャン　ＰＡＲＴ２（後書き）

いかがでしたか？
クライマックスまで、もう少しです。
どんどん更新していくので、よろしくです。

ルーチェ・エデンズ・キー

「兄・・・・・さん？・・・」

一人の少女は、悲しみに揺らぐその瞳をこちらに向けた。その横顔が、月明かりに映え、ボクはその瞬間に何とも言えない既視感を覚えた。

そして、ボクがそうこうしている内に、彼女が駆け出し、僕の胸へと飛び込んだ。

「兄さんっ！！ユグ兄さん！！会いたかった！　会いたかったです兄さん！　ごめんなさい・・・・あの時、兄さん達のいうことを聞かないでしまって、だから・・・・こんな・・・」

「えっ！！　ちょっと・・・これは、どうなってんだ！？」

『・・・・・・』

当然のごとく、ボクや岡田先輩、是沢先輩はまったく話しに付いていけてはいない。

「成瀬、俺達は別のところに行って来るから、ゆっくり、な」

「えっ！　ちょっ、待って！」

そう言おうとしたら、それより早く、岡田先輩達は、トンヅラしていやがった。

そして、少女はボクの胸に寄り掛かり、グスグスと音を立てて泣いている。

「ねぇ、ボクが君の『兄さん』ってどういうこと？」

「・・・・兄さんは、兄さんです・・・・・・」

『そのままの意味だ、マスター』

「いや、そのままって言われても・・・・」

『・・・まぁ、仕方ないか。ゼルティアと違い、前世の記憶が無いのも無理は無い。

この方は、エデンの鍵製造メンバーだった頃のマスター、『ユグラルト・ルーン』様の妹君、『ルーチェアルト・ルーン』様だ。』

ムギンが淡々と語っているのに、ボクはあまり気に止まらなかった。

どうしてだろう？　なんて、思っているところで何の効力もない。

「ねぇ、ルーチェ・・・・・」

「はい、兄さん・・・」

「さっきの謝罪は何なの？」

「・・・・・・・・」

「い、いや。言いたくなければ、良いんだ、無理する必要は・・・ないし」

「・・・いえ、言って置かなくてはいけません。これは、私のや

るべき事でも在りますから・・・・」

知らない間に、ルーチェは泣き止んでおり、ボクの胸から離れた。そして、彼女は大きく息を吸い、月明かりが顔を照らし尽くす位置まで下がってから、切実な願いを口にする。

「お願いです。私を・・・・私をっ！　殺してくださいっ！！！！！」

ルーチェ・エデンズ・キー（後書き）

いかがでしたか？
感想など、よろしくです

ルーチェ・エデンズ・キー　PART2

「私を、殺してください！！」

ルーチェが発したその言葉の意味を、ボクはまだ図れずにいた。

「・・・・それは、どうして？」

「・・・・・・」

『成り行きを、話してやったらどうだ？』

ムギンが静かに、でもはっきりとした声でルーチェに言った。

「はい・・・・分かってます。」

すぅーと大きく息を吸い、回想を開始する。

「兄さんを含めた、皆さんがエデンの鍵を完成した頃です。私はエデンの鍵を一目見た時から、すごく・・・・綺麗だなって思ったんです。『一回触ってみたい』『綺麗だ』この感情ばかりが、延々とループしていました。でも、兄さん達は『エデンの鍵には触れてはいけない』と言い付けられていたから、当然触れないようにしていました。だけど・・・」

「だけど？」

「私は遂に自分に負けてしまって、軽く触れてしまいました。そして、そこから悲劇は始まりました。

触れた鍵は、すぐにわたしと一体化しました。その後の記憶はあまり無いのですが、多分、私と一体になった鍵は、チカラを開放して人々を強制的に戦争させたんだと思います。そして、気が付いたら兄さん達に囲まれていて、強制的に東の地に飛ばされ眠りに入りました。　そして、今に至ります。」

「・・・・・・」

「エデンの鍵は、きっと私の欲望を使って、人々の悪意を加速させてたんでしょう。だから、私の眠っている間は効力がなかった。でも、私が目覚めた今、エデンの鍵はまた同じ事を繰り返します。だから、お願いです！！　私を殺して、鍵を破壊して下さい！！月が全て欠けるまえに・・・・」

「・・・・そんなの・・・・・」

ボクは、妹を殺さないといけないのか？　世界約６３億人の命を救うために。
当然計りに掛けるまでも無い。　でも、家族を失って、もう何も失わないようにと心に決めた誓いを無視できるのか？　いや、できない。
見ず知らずの人の命も、妹の命も、己が被る罪も、全てボクの中では同等なのに・・・

「・・・・・ボクに・・・・・何が・・・・・・」

と、そんな絶望が、ぼくの中を渦巻いているままだった。

ルーチェ・エデンズ・キー　ＰＡＲＴ２（後書き）

いかがでしたか？
感想等、よろしくです

これさわエンジェル　PART1

　さて、何だかんだの厄介事をうまい事成るチャンに押し付けた、俺達はというと。

「岡田さ～ん。これからどうします～？　あの様子じゃ、役員室には出入りできなさそうですし～」

「そうだな。エデンの鍵は見つかり、成瀬が保護。破棄には一時の時間が必要だが、今のところ俺達の勝利に間違いは無い。となると・・・・」

「会長さん達への応援、ですな」

「そうなるな。だが、俺はそれに行けそうに無い。」

「？なんで？」

「本条の言い付けでな。エデンの鍵が見つかり次第、戦闘準備を整えておくのさ。万が一、暴走・・・なんて事があったら大変だからな」

「そうっすね。岡田さんの場合、１００％のチカラを出すのに、何かと面倒がありましたな」

「ああ、『精霊騎士』って聞こえは良いが、精霊との対話や同調、他にも精霊同士の統括、及び魔力配分と色々大変なんだ」

「分かりました。会長さんとこの応援は俺に任せて、岡田さんは準

備しといてください」

「ああ、悪い」

「良いって事」

そう言って、岡田さんは俺から離れ、別行動を執った。

「そんじゃ、俺も行きますか。『二クロス、ラグナロク・ラジエル』」

そして、俺のチカラは具現化する。白く、何にも染まらないこの双翼は、いつもの通り、だ。

「歩くより、飛んだほうが楽だからな――――――」

そう言い終って、すぐの事だった。

トコトコトコ。

不快にさえ思うその足音に、俺は気だるく思いながら、身構える。

姿を現した足音の主はこちらに気付くと、深深と頭を下げた。

「これはこれは、神獄学園の生徒会役員の方とお見受けする。私は『ラムダ』と申します、お気づきの通り、政府側のエデンの鍵捜査班です。」

「へぇ、それが何？」

小柄な男は、頭をあげ、似非笑いを浮かべる。

「いやいや、怖い怖い。そんなに威嚇しないでくださいよ」

「ふ～ん。で、用件は？」

「それは・・・・もうっ！！」

その瞬間、男は姿を消し、いつの間にか俺の背後に回っていた。

「く！！」

咄嗟に、光の壁を作って難を逃れたが、間一髪って感じで危なかった。

「さすがは、最高位のバルシェラー。この程度の攻撃では、死んで下さりませんか」

「・・・・・」

「では、始めましょうか。鍵の争奪戦、って奴を」

男の似非笑いはその間に、ずっと消えることは無かった。

これさわエンジェル　ＰＡＲＴ１（後書き）

いかがでしたか？
感想当、よろしくです

これさわエンジェル　PART2

「ハァ・・・・ハァ・・・・」

「どうしましたか？　もう息が荒くなっていらっしゃる」

ラムダが、人を喰ったような表情で言う。それも当然だ。なんてったって、俺が一方的に押されているからな。

「うっせぇ・・・なっ！！」

「ふふふ、虚勢を張っても無駄ですよ？　なんたって、貴方と私では、相性が悪い。それにこの立地条件。またしても貴方にとっては不利そのものなのですから」

「だぁ、まぁ、れっ！！」

そして、俺は羽を羽ばたかせ、敵に閃光を放った。が、ラムダはまるで、ダンスでもしているかのように、するりとかわしていった。

「だから、無駄ですって。私のバルシェ『ソロモン・D・ガァープ(悪魔男爵)』の前では、貴方の光の矢など止まっているようにしか見えないのですから。」

「くっ」

ラムダは今も、似非笑いを浮かべている。だが、俺はそれと同じぐらい気味の悪い笑いを放った。

「ふん。それは、可笑しいな。崇高な天使がたかが悪魔風情に押されるなんてな・・・
あぁ～あ、メンド。これじゃ『本気』出さなきゃなんねぇじゃねぇか。」

「ん、なんですって？」

さっきまで浮かべていた笑みは消え、深刻な表情へと変化した。

「まぁまぁ、そう構えるな。大丈夫。すぐ終わるから」

そう言って俺は、自らの羽を消した。

「くくく・・・くははははっはははははっはははっ！！　なにをしようかと思えば、戦意喪失ですかっ！！
滑稽っ、滑稽ですよ！ハハハハ」

「勝手に言ってろ」

羽を解いたには、戦意が喪失したわけではない。羽があると、被害が大きくなるから、だ。

「ハハハハ、では、死になさいっ！！！」

ラムダは自ら生み出した、拳銃を構え、俺の元に撃ち込んだ。
そして、その瞬間。

『真実詠唱っ！！　Ｆ＝Ｆａ・ＣＯＮ１８０度っ！！』

言葉を放った後、敵の弾丸は俺の目の前で制止した。その後、方

向を１８０度変え、全弾、ラムダに命中した。

「ぐはぁっ！！！！」

当然、自らの弾丸を受けたラムダは、仰向けに倒れた。

「ど・・・・どういうこと・・・だ？・・・」

「これが俺の本当のチカラ『強制物理変化』さ。元々、このチカラは光を操るものじゃない。『世界に極当たり前に存在している法則』を自在に曲げて、支配する。

これは、俺の真骨頂だ。」

「ふふふ・・・・ど・・・りで・・・かて・・・・ないわけ・・・・だ」

「まぁ、ゆっくり眠るといい。急所は外れてるはずだから、死にはしないさ。」

そして、俺はその場をあとに、会長さんたちのいるグラウンドへと足を急いだ。

これさわエンジェル　ＰＡＲＴ２（後書き）

いかがでしたか？
感想等、よろしくです。

まさきマジシャン　ＰＡＲＴ３

「・・・とりあえず、ここから出よう。ここに居ても何も変わらない」

「そう・・・ですね」

ルーチェは曖昧にそう答えた。当然、ボクも現状を明確に理解しているわけではない。ただ、分かっているのは

『ルーチェを殺せ』

これだけみたいだ。

「・・・どうしたんですか？　兄さん」

気が付くと、ルーチェは扉の向こうで待っていた。

「ああ、なんでもない」

そう言った後、ボク等は生徒会室を後にした。

ーーーーーーーグラウンドーーーーーーー

「ーーーーーーーーッ！！」

ボク等がグラウンドに着いた頃には、信じられない光景が広がっていた。
辺りは、地面が抉られ、周りの物はその原型を留めていなかった。そしてその中央に会長と大和がうつむせで倒れていた。
「会長ッ！！　大和ッ！！」
ボクが慌てて、駆けつけ会長を抱きかかえると、会長は虫の息で、ヒューヒューと小さい呼吸を繰り返すばかりだ。
「マ・・・サキ・・・・」
「大和ッ！」
大和は如何にも死にそうな感じで、声を振り絞る。
「鍵を・・・・鍵を連れて・・・行け・・・・・。あいつ等に・・・わたす・・・な・・・・」
「大和ッ！！　馬鹿いうなッ！！会長も死にそうなのに！！」
「いいか・・・ら・・・行け・・・鍵を・・・・こわ・・・せ・・・・」
「嫌だよ！！　死ぬな！！」
大和の顔からどんどん血の気が消えていく。その中でも、大和はただ、笑って言った。

「・・・・・ありがとう・・マサキ・・・・」
　これだけ残して、大和は糸が切れたように、倒れ、動かなくなった。当然、会長も、だ。
　ボクは、顔を酷く歪め、嗚咽が零れる。涙と鼻水で、もう、グシャグシャだ。
「おいおい、俺達のことはシカトかよ」
　声が聞こえ、その方向に振り返ると、大鎌を持った男と、それより巨大な斧を持って男が立っていた。
「お前らが・・・会長を・・・・」
「お、いいねぇ。その憤怒。悲しみ、実に良い。それでこそ、殺し甲斐があるってもんだ。なぁ、ミュー？」
「・・・・・」
「・・・・・・殺してやる」
「あ？」
「殺してやるッ！！殺してやるッ！！　お前等なんかッ！！」
　そして、ボクは二人の気付かぬ間に、頭上へと跳躍し、己が全てをぶつけた。
『ルーンの禁忌、２番ッ！！　七魔将の爪（ロイガバル・ディーメント）ッ！！』

槍から派生して産まれたその巨大な爪は、鎌のように敵に襲い掛かる。だが・・

「・・・芸がねぇ」

瞬間。爪は音を立てることも無く、崩れ去った。

「―――――――ッ！！」

着地したボクは、眼を疑った。ルーンの禁忌は、それ単体で、対象を破壊するまで消えないはずなのに。消えた。否、存在が無くなったのか？

「まったくよぉ。もっと、気前良くいこうぜぇ。なぁ。死戦の魔術師さんよぉ！！」

驚きと絶望に身を任せているボクに、男の声だけが響き渡った。

まさきマジシャン　ＰＡＲＴ３（後書き）

いかがでしたか？

ルーチェ・エデンズ・キー　殺戮の天使

「おいおい、どうしたよっ！！？　動きに切れがねーぞ？！！」

鎌を持った男は、その鎌を振回しながら、ボクに襲い掛かる。当然ボクは、自らの槍で応戦するも、近くにいるルーチェを守りながら、戦っているからどうしても防戦一方になってしまう。

「クッ！　『ルーンの４８番、呪縛の杭を行使する！！』」

放った杭を全弾、相手に命中した。でも――――

「だから、芸が、ねえんだよッ！！！」

それらも、煙のように消え、鎌を振った際の風圧で、ボクは大きく飛ばされた。

「――――――――――ッ！！」

「ハハハッ！　無駄だ！　誰もこの『ソロモン・Ｌ・ロノウェ（悪魔伯爵）』の前ではなぁっ！！」

地面に叩きつけられた僕は、ただ思考を続けていた。どんな上級魔法を叩き込んでも、すぐに煙のように消えてしまう。おそらくそれは、会長と同じ『アンチマジック』の類だろう。

ん？　そういえば、ムギンやフニンの気配が無いっ！　一体何処へ？　そんな事を思っていた、その瞬間だった。

「きゃあ！　はなしてっ！！　放してくださいっ！！！」

突然の悲鳴にルーチェの方を仰ぎ見る。すると、ルーチェは斧を持った大男に掴まれ、拘束されていた。

「ルーチェッ！！」

「ほう？　必死そうだな？」

ボクの腹を思いっきり踏み付けながら、男は言った。

「おいおい、まさかあんなのがエデンの鍵とか抜かすのかよ」

「ち・・・ちが・・・・」

「ふん、まぁどうでもいいことだ。おい、ミューッ！！」

斧を持った男はわずかに首を動かした。そして、ルーチェの頭をわしづかみにして、天に高々と掲げる。

「な・・・何を？」

「ああ、これからいいもんを見してやるよ。テメーは黙ってみてろ。」

気が付けば、さっきまで満月だった白い月は、もうその姿を消しつつあった。

『万物を楽園へ。無を地の底へ。』

ミューの言葉が、たちまち月の欠ける速度を上げた。それと同時

にルーチェも苦しみながら悲鳴を上げている。

「や、ヤメロッ!!!」

「うるせぇんだよッ!!」

そして、月が全て欠けると、ルーチェの体が、強烈な光を放った。白くて、巨大な光。　その光が消える頃には、さっきまでのルーチェの姿を何処にもなかった。

黒かった髪は白く染まり、背中には八枚の白い翼をもち、その瞳は血のように紅く濡れていた。

「あれが、殺戮の兵器。いや、殺戮の天使、か。」

ルーチェはただ、空に上がり、獣のような咆哮を周囲に轟かせていた。

ルーチェ・エデンズ・キー　殺戮の天使（後書き）

いかがでしたか？
感想等、おまちしております

おかだジェネラル　ＰＡＲＴ１（前書き）

お久しぶりです。

おかだジェネラル　PART1

「おいおい、これは・・・・化け物じゃねーか・・・」

ルーチェの姿を見て、イプシロンはそっと呟く。彼女は、ルーチェは前のときも、こうしていたのだろうか。ただ、そこに居るだけの化け物に・・・

「・・・これでいい。これでエデンの鍵はこちらのもんだっ！」

そう言ってイプシロンは、踏みつけていたボクを蹴り飛ばした。

「――――ッ！！」

「ミュー。始めるぞっ！」

イプシロンは、ルーチェ目掛けて走り出す。そして、高く跳躍し、自らの鎌をルーチェに向かい、振りかぶった。　その鎌は大きく、ルーチェの肩に食い込む。やがて引き千切れ、赤の血が噴き出した。その間、ルーチェは無言を貫き通す。ただ空を眺めているだけだ。

『混沌の淵に、真理へと至りし我が眷属よ。我に仇名すものに絶対の裁きを』

ミューが真言を放つ。そして、その声に応えるかのように、イプシロンの鎌が紅く光を放ち出す。

放たれた光は、やがてルーチェを覆い隠した。

「フ、まぁこんなもんだろ」

地上におりたイプシロンが呟く。ミューも真言を唱えるのを止め、無言でルーチェを見つめていた。

そう、奴らはルーチェを『捕獲した』んだ・・・・

「クッ・・・・・もう、駄目か」

「ハハハッ！　こいつはいいッ！傑作だ！！何が、殺戮兵器だ！何が、神と同等だ！？　俺達（ソロモン72柱）の前じゃ、この様だッ！！　ハハハハハハハッ！！」

イプシロンが勝利を確信してか、声を上げて笑っている。そして、ボクが希望が終えて地に伏する。

だが、その瞬間。ここに居る全員が、驚愕する事になった。

ルーチェを包んでいた光は、軋む様な音を立てながら、ゆっくりと、収束していくのだ！

「おいおい・・・・こんなことが・・・・」

「・・・・・・・」

イプシロンとミューも予期せぬ事態に混乱しているようだ。当然だ。あれだけ自信たっぷりだったイプシロンとミューの創った捕獲用の結界が軋み、今まさに壊れようとしているのだから。

キシキシキシ・・・・パリィィィィン！・・・・・・

まるでガラスが割れたような音を立て、結界は崩壊した。だが、その結界の破片はまだ、宙に残ったままだ。

「・・・や、ヤベェ・・・・おい！逃げるぞ！！ミューッ！！作戦は失敗だっ！！　アンチマジックの効かないコイツに勝ち目はネェ！！だから、逃げ――――――――」

最後まで言い終わる前に、イプシロンは自ら作った結界の破片を体全身で浴び、ゆっくりと、だが、その所為でなんとも残酷に、なんともあっさりと、消えて行った。当然ミューも。生き残ったのはボク以外の屍は綺麗に、跡形も無く消えてしまっていた。

「・・・・嘘だろ？・・・・どうして？・・・・こんな・・・・こんな事がッ！！」

さっきの二人も、会長も、大和も、みんな、消えてしまった。何もかも、まるで霧が晴れてなくなったように、幻が煙みたいに消えるように。全て、全て消えてしまった。

「どうしてだッ！！　どうして！？　お前がここまでしなくちゃいけないんだよッ！！！？　そうして、そんな簡単に人を殺せるンダッ！！　ルーチェぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

ボクの叫びは、おそらくもう、ルーチェには届いていないのだろう。それを堂々と宣告するかのように、ルーチェはただ、虚空を見つめている。

「成瀬ッ！！」　「成るチャンッ！！」

地面に打ちひしがれていたボクの前に、岡田先輩と是沢先輩が姿

を現し、走って駆けつけた。二人共体中が傷だらけできっと、戦いの影響だという事は容易に想像できた。

「おい、成瀬しっかりしろ！」

「岡田先輩・・・会長が・・・・」

言葉を躊躇う。だが、先輩はどうやらその反応だけで、事態を概ね察したのだろう。つらそうに表情を濁らせる。

「・・・・・そうか・・・・・よく、頑張ったな。成瀬」

「・・・・・うぅ・・」

自分の弱さに此処まで腹が立ったのは初めてかもしれない。それが、たまらなく、歯痒い。

「是沢。お前は、成瀬を頼む。怪我を治してやれ」

「？　岡田さん・・・・・」

「その間に、俺は・・・あの、天使みたいな悪魔を、ぶった斬ってくるッ！」

そう言いながら、岡田先輩は立ち上がり、ルーチェと対峙する。岡田先輩は、まだチカラを発現させてはいない。これだと格好の的じゃないか！

「岡田先輩・・・・ッ！」

「こら、成るチャン。ここはしっかり見届けるんだ。黙って、な」

「・・・・・」

是沢先輩に宥められ、またボクは歯を噛み締め、この状況を見守る事に徹した。

『・・・・・・ラス・・・・ラステジオ・・・・』

エデンの鍵は、岡田を見据えたままピクリとも動かない。いや、岡田を見ているのかすら分からない。ただ、ぼんやりとしているだけだ。

初めて、エデンの鍵は口を開いた。

「ほう、ちゃんとしゃべれるじゃねーか。出来損ないのくせによぉ。」

『・・・・うるさ・・・・い・・・・』

「？」

『黙れ黙れ黙れ黙れ黙れェェェェェェェェエエエエエエエェッ！！』

その時、何も無かったエデンの鍵の周りに、氷の尖塔がいくつも

岡田に向けられ、そして放たれた。

『お前らに・・・・・我を裏切ったお前らに・・・・・我を侮辱するなぁぁぁぁぁぁぁああああああああ！！』

氷の尖塔は、絶えず、岡田に打ち込まれる。だが――――――

「千年雪の霊雹（コールラズ・セイント）か。オレの技、良くできてるじゃねーか。でもな―――」

岡田の姿が見えないぐらい撃ち込まれたそれを、跳ね除ける。当然、彼自身の魔力で、だ。

『ダグラス、サー・ラステジオ』

自らのチカラを開放する。だが、その時に出てきたのは大剣だけだった。

『貴様。ご自慢の『炎の鎧』はどうした？！』

「そんなもんは必要ねーよ。なぜなら」

そう言った瞬間、辺りの風はざわめき、大地は震え、このフィールドのありとあらゆるところから、光が出て、岡田の背後に集まる。

『そ・・それは、マサカッ！！！』

「ああ、そのまさかだ。とくと見るがいぃッ！！　何人たりとも！！　我が軍隊止める事は叶わんッ！！！」

そう。これが、彼自身が用意していた秘策にして、彼の本当のチカラ『精霊軍隊（スピリチュアル・ソルシエーユ）』である。

「この空間の全ての精霊は実体を得た。さぁ、覚悟しろッ！！！お前のその羽根を、全て焼き払ってくれるッ！！！！！」

おかだジェネラル　ＰＡＲＴ１（後書き）

いかがでしたでしょうか？
感想等、よろしくお願いします

おかだジェネラル　PART2

もしかしたらボクは、今、結構とんでもない状況下に身を置いているのだろうか？　ふと、そんな事を思ってみる。
なぜなら、今この場は、異常な空気に包まれているからだ。方やエデンの鍵に取り付かれたルーチェ。方や無数の精霊を引き連れた岡田先輩。この勝負、どっちが勝つのか今の僕には考えも付かない。

そして――――――――

『死ねッ！！　ラステジオォォォォォォオオオオッ！！』
「怯むなッ！！　真正面から叩き込めぇッ！！！」　『オオォォォォォ！！』

エデンの鍵と岡田先輩の（いや、この場合は、岡田軍団か）の壮絶な属性魔法大戦が始まった。
エデンの鍵は、幾つもの光の矛を召喚し、軍団を薙ぎ払う。しかし、相手は精霊。元々実体が無い為物理的な攻撃は、全て大きな意味を成さない。対する岡田先輩は、先陣に風と水の精霊を配備し、エデンの鍵を翻弄し、第2陣の火の精霊は、遠距離から鏃（やじり）状の炎をエデンの鍵目掛けて放つ。
そして、それらの攻撃はエデンの鍵の羽根だけを撃ち抜いた。当然、エデンの鍵は翼を?がれ、地に落ち、伏した。

『く・・・・・くぅ・・・・』

地に落ち、翼を?がれたこの兵器には、もう成す術がないのだろ

う。ただ、呻いているその姿には先ほどの威勢は、幻想のように消え失せていた。

「これで、チェックメイトだ。」

力尽きかけのエデンの鍵に近づき、大剣を振りかざしながら、岡田先輩は言った。

『なぜだ・・・・・・』

「ん？」

『なぜ貴様らは、我を裏切ったッ!?』

「さっきからお前は何を言っているんだ？」

『黙れッ!忘れたとは云わせぬぞッ!!あの時、貴様らは、我を殺そうとしたではないかッ!!世界を・・・・世界を救うために尽力した我を、在ろう事か、このような場所に閉じ込めたッ!!　信じていたのに・・・・・・信じていたのにッどうしてッ!!』

「それは、お前が、暴走を起こしたからで――――――――」

『黙れッ!もう何も聞きたくなどないッ!!偽りだらけの貴様らの言葉など・・・・・ッ!』

そして、エデンの鍵は、声にならない叫びを上げながら、絶望と悲しみの涙を流していた・・・

おかだジェネラル　ＰＡＲＴ２（後書き）

これからもよろしくお願いします

ルーチェ・エデンズ・キー　ＬＡＳＴ　崩壊する生徒会

「これで、ようやく、終わりだな」

岡田先輩は静かに呟く。エデンの鍵は未だに地面に顔を伏せ泣いているままだ。

「これで、終わったんですね。是沢先輩」

校舎の壁に体を預け、僕は近くに居る是沢先輩に対して、と言うよりは半分は自分に対してそっと呟いた。

「ああ、これで本当に終わるのなら・・・な」

「どういうことですか？」

「・・・・・・本当は、こんな時にこんな話をするなんて、場違い甚だしいんだけど、どうも俺にはこのまま終わるような気配がしないんだ」

　声に強さはなく、まるで、適当な言葉で真実を隠すかのように、是沢先輩は言う。確かに、言われてみれば、いくつか疑問は残る。そう、例えば

「鍵はまるで、ボク等が先に裏切ったような言い方をしていましたね。そこですか、気がかりなのは？」

「それもだけど・・・・やっぱいいや」

そう言って是沢先輩は、「へへへ」っと笑ってみせる。でもそれは、何かを隠している時など見せる、曖昧な笑い方だった。

『が・・・アがぁぁぁぁぁぁぁぁ嗚呼ああああああぁぁぁぁぁぁぁぁあああ！！！』

耳をひどく劈く、まるで獣の獰猛さと、機械の冷徹な感じの音が合わさった奇声が辺りを支配した。声のほうを見ると、エデンの鍵がうずくまり、声を上げている。そして、鍵はルーチェ諸共、白い光で包み込んだ。

「何が・・・何が起こっているッ！！」

岡田先輩が声を上げるが、誰もその答えを説明できるはずもなかった。やがて、光が収まると、白髪の天使は消え、変わりにうつ伏せに倒れたクリーム色の髪の少女と、その背後には、光の球体が残った。そして、その光の球体こそが、おそらく・・・・・・

「「「あれが、エデンの鍵・・・・・」」」

3人ともが、静かにそう呟く。鍵とは言ったが、それ自体は、鍵の形状などしていなかった。でも、それ自体がエデンの鍵であるということは、本能的に、と言うよりは、記憶に在ったと言った方がいいかもしれない。

岡田先輩が、鍵に向かって歩みだす。是沢先輩もボクも、それに釣られて鍵の傍まで来て、鍵の前に並んだ。そして、ボクは膝を突いて、ルーチェを抱きかかえる。どうやら気を失っているだけだ。

それからボクは、鍵の方へ視線を戻す。

「これでやっと、終わるんだな・・・・・」

そう言って、手にしていた大剣を振り上げる。そして、鍵に向け、振り下ろそうとした瞬間――――

ガシャンと、まるで、鏡が一斉に割れたような音を立て、鍵の周りに居るボク等の周りは、砕け散った。そして、砕け散った世界から見えるものに、ボク等は驚愕するばかりだった。

「・・・・そんな、こんな事が・・・・・」

意味のない絶望が、辺りに響く。そして――――――――

「どうして、君がそんなに驚くの？　岡田君」

そう、そこには戦闘で死んだはずの会長が
　　エデンの鍵を手にしていたッ！！

「・・・・本当に、本条・・・なのか・・・」

岡田先輩が、震えた声で、問う。会長もそれに応えるように微笑み返す。

「ええ、そうよ」

会長が、生きていた。死んだはずの会長がたった今、こうしてボク等の目の前に居る。驚きと歓喜でごちゃ混ぜになったボクは、ただ安堵に浸っている。

「・・・・・やっぱり、こういう結末か・・・・・」

隣に居た是沢先輩が静かに呟く。そして、会長の前へと出た。

「会長さん。生きていたのは嬉しいんだけどさ、そろそろ、鍵を破壊してくれないかな？」

さっきまで浮かべていた微笑は、まるで嘘だったかのようにあっさりと消え去った。そして、何かに怯えたように硬直する。

「どうしたの？俺たちの悲願じゃないか、会長」

「・・・・・・・・・」

「どうして、鍵を壊そうとしないの？　ずっと握り締めたままなの？　そんなに鍵がほしいの？」

「・・・・・・・・・」

「・・・じゃ、質問を変えよう。大和は、何処だ？！」

「――――――――――ッ！！」

まるで、名探偵にトリックを暴かれた犯人のように、会長はさらに硬直する。そういえば、大和の姿が見当たらない。会長が生きているなら、大和が生きていてもおかしくはないのに。なぜ？

「答えられない？　だったら俺が教えてやるよ。それは――――

『大和は、この学園には存在しない架空の人物であり、会長さんが操る人形だったから』

どうかな？当ってる？」

「・・・・・・・・・」

会長は、是沢先輩をただ見つめているだけだ。許しを乞うようでもなく、衝撃に表情を染めるわけでもない、ただ、機械のように見つめている・・・・・

それって、つまり・・・・ボク等への裏切り・・・・なの・・・・か・・・

「黙っているのは、肯定だから、と解釈していいかな？」

「・・・・・・ええ、正解よ。翔は、此処には居るはずのない人物よ。いえ、その表現は正しくない。正確には、『翔はもう、この世には存在していない』、よ」

「・・・・やっぱりか。道理で何度占っても、結末が変わらないわけだ・・・・

会長さん。何でアンタがエデンの鍵を欲しているのか、そんな事は俺には判らない。けど――――

何で、俺たちを裏切るんだよッ！？　何か理由があるなら話してくれたっていいじゃねぇか！
それをさ、自分独りの中に抱え込んで、挙句の果てには、大和なんていう『虚無』を造って、俺たちを欺いて、そうまでして、何がしたいんだよッ！！答えろよッ！！」

是沢先輩が、会長に咆えた。あの、いつも優しくて温厚な人が、慟哭を顕している。瞳には、光るものが見え隠れしている。

「どうして・・・どうしてだよ・・・会長さん・・・・・！」

「・・・・あなた達には、分からないでしょうね。いえ、理解なんかされてほしくもないわッ！！
私には、果たさなきゃいけない約束がある！そのためには、このエデンの鍵がどうしても必要なの！だから、私は、あの子との約束のためなら・・・なんだってやってやるッ！！！」

　そして、会長は手にしているエデンの鍵を自分の胸へと押し当てた。

「や、ヤメロッ！！　本条ぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

　岡田先輩が叫ぶ。でも、その頃にはもう何もかもが遅すぎて、会長とエデンの鍵は、今、一つになった・・・・ルーチェの時と同じ、髪は白く染まり、眼は鮮血色になって、白い羽根を抱いている。

「・・・・さようなら、みんな・・・」

　そして、会長は羽を羽ばたかせ、藍色の空へと飛び立った・・・・・

「どうして・・・・どうしてだぁぁぁぁぁぁ！！！」

　岡田先輩の咆哮は、もう、会長には届かない・・・・

ルーチェ・エデンズ・キー　ＬＡＳＴ　崩壊する生徒会　（後書き）

いよいよ、次回最終回です。
更新は、３月上旬を予定していますので
よろしくお願いいします。

最終話　旅立ちは夏休みにて

あれから、一ヶ月近くの時が経った。今ボクは、生徒会室の自分の席に座ってぼんやりとしている。

ボクの他には誰も居ない。ささやかな静寂だけが、ここにある。まるで、散り散りなっていったボク等を思わせるように――――

岡田先輩は、まだ気持ちの整理がついていないのか、生徒会室には顔を出さず、

是沢先輩は、時たま来ては、誰も居ない事を確認してから、微かな声で自責を繰り返していた。

ただ、『俺は、正しかったのだろうか』『俺が黙っていれば、誰も傷つく事はなかったんじゃないか』とこんな言葉を延々と・・・ボクはそれを、影から聞いていた。虚ろな声にも拘らず、ボクにはそれが、泣いている様にしか聞こえなかった。

それだけ二人は、会長と時間を共有し、信じ合っていたんだ。戦って、苦労して、鍵を見つけるために必死になっていた彼らにとって、会長の存在が大きなものだったのは容易に想像がつく。だから、こうして感慨に耽る事ができる。

じゃあ、ボクは?

会長が、裏切った。大和が死んでいた。こんな事があったにも関わらず、ボクは・・・未だに現実を感じる事ができていない。いや、自分でも馬鹿だと思うぐらい、なにもないんだ。

大和が死んだ。でも、涙が出ない。

会長が裏切った。けど、そこまで心が痛まない。

ボクは、どうしてしまったのだろう？　こんなの・・・まるで・・・

「自分が何も感じない人形だ、と？」

突然、後ろからの声で、振り返った。そこには、是沢先輩がいつも通りの屈託のない笑顔を浮かべて立っていた。

「これ・・・さわせんぱ――――――」

「しっかし、もうすぐ夏休みだな～。今年はどうしようかな～。成るチャン何か予定ある？」

「そ・・・そんな事言ってる場合じゃないでしょう！会長が居なくなったんですよ？！」

「そうだな～。会長さん居なくなったけどさ、いつまでもウジウジしててもしょうがないじゃん」

「だからって！――――――」

「まさか成るチャン。俺と岡田さんがたかだたあの程度のことで諦めたと思ってる？」

「え？・・・それはどういう意味で――――」

「こういう意味だ、成瀬」

是沢先輩の後ろから、大きな旅行用のカバンを持った岡田先輩が出てきた。

「岡田さん、頼まれてたもの、準備できてますよ。」

「こっちもだ。これだけありゃ、一か月程度は持つだろう」

「え？・・・・・これは、いったい・・・」

ボクが驚いて混乱してるのが分かったのか、岡田先輩と是沢先輩が、二人揃って高らかに宣誓した。

「「会長さん（本条）を、探しに行くぞッ！！　成瀬！」」

「・・・・・嘘でしょ」

「何を言っている？　丁度後2日で夏休みなんだ。この機に本条を探して何が悪い？　この時のために俺たちは準備してたのに」

そうか。だから、生徒会室に顔を出してなかったのか。でも、

「探すったって、何処を？」

「それがさー、大体の目星は付いてんだよねー」

「費用とかは？」

「ん？　生徒会会計持ち」

なんて事を。でも、この人らしいと言えば、この人らしい。だったらーーー

「・・・・・分かりました。行きましょう！会長を探しに！」

「「そう来なきゃ」」

「その代わり。二人にはある約束をしてもらいます」

「何だ？」

「必ず、此処に会長を連れて帰った来て、文化祭などの準備で徹夜しましょう！！」

「・・・・・・・・」

二人が眼を丸くしてボクを見入っている。それもそうだ。ボクがこんな冗談なんていつもは言わないのに。これも、此処にきた影響なのかな・・・

「ああ、そうだな。腹一杯に、死ぬまで本条には働いてもらおうか」

「岡田さん。その言い方、怖い。」

「良いじゃねーか。なぁ、成瀬」

「はい、それぐらいしてもいいです。」

そうだ。会長を連れ戻す。たとえ会長が望まなくても、ボク等が無理にでも連れ戻す。それが・・・

『俺（ボク）らのやり方だ！』

最終話　旅立ちは夏休みにて（後書き）

どうも、成瀬　葵です。今までこの作品をご覧頂きありがとうございました。

いろいろと皆様にご迷惑をお掛けし、『読みにくい』作品に練っていたにも拘らず、多くの方に読んで頂き、とても幸いと思います

本当にありがとうございました！！

この話は、とりあえず終わりを迎えますが、近々第2部『“エデンの鍵”とローマ教会の利己主義（エゴイズム）』をお送りします。

では、またお会いしましょう。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6139h/

“エデンの鍵”と生徒会という名の探索部隊《ファインダー》

2010年10月16日00時45分発行